WASO6
HQ
1104
J77f+
Nov. 1890
no. 237

女學雜誌

明治二十三年十一月一日發行
第二百三十七號
一册六錢。每土曜日發兌

敎師三昧
露小袖の評

眞雄辨

木村榮子
奴小万の傳

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜 女 學 誌

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 236. October, 25th. 1890.

EDITORIAL:—Aristocratic moral—The True Eloquence.
MISCELLANEOUS:—Brief History of Japanese Pictures, (Suyematsu Kentō). One great faut in Modern Education, (Momiji). "Sketching on the beach," (Tanabe Kaho). "A Fellow Shōman," (Tenchishi). The Character of the Nurse, (Rōkensei). What moved Columbu's mind, (Kasumi). An Interview with Mrs. Niijima. The Secret of Mr. Morita, the Manufacturer of "Hōtan." The Success and Eailure of Work—Do Women Mostly Fail? (Usui Sanjin). Humourous, (Sharakusai Shujin). Life of Akebono Zoshi, —Kimura Eiko.
NOVEL:—"The Little Lord Fountleroy."
CRITICAL NOTES:—"Japanese Girl's Primer, Japanese Girl's, Reader. Model for Letter Writing. The Newly edited Philosophy, Japanese Encicropidia.
PERSONAL CRITICAL NOTES. "Shigarami" Magazine No. 11. (Unpōshi). "The Poor"
CONTRIBUTED ARTICLES:—
Do not make the "Eloquent Society" a mere "Fluent Society," Female Schools in Tokio.
NOTES. AND NEWS.
CONCERNING WOMEN.

第二百三十七號目次

社說　貴族的、道德論、矯風論、
雜錄　日本繪の歷史概略(末松謙澄)●近時教育の大欠點(もみぢ)●磯のふで草(田邊花圃女史)●奴の小万(天知子)●看護婦の資格(香軒生)●コロムバスを動かせしもの(かすみ)●新島襄先生未亡人の談話●守田寶丹翁秘訣●事の成否、女子多く失敗する耶(下)(碓氷山人)きよめぬ庭(洒落齋主人)●通俗理解●咄女史木村榮子の傳(清花女史)
小說　小公子(若松しづ子)
批評　日本女子讀本初歩●日本女子讀本●女子文例●新編物理學●嫁入仕度に教師三昧●新著百種、つゆ小袖●幕府時代小說叢書(撫象子)●日本の歌學全書●しからみ草紙第十一號(雲峯子)●評論監獄世界(新誌子)
一家評　●うたかたの記(清隱子)●貧民(全)
寄書　能辯學會をして輕辯學會たらしむる勿れ(可愛子)●耕余學會雜誌(全)
交詢　●東京中の女學校●野田氏一女子●稻花生●知北品行取締となる
時事　監督の女●伯爵夫人●ユニテリアンと佛教●女子傍聽禁止●遺す所なし●在住民と宗教●經濟さ道德●家政●ラホラトリー●廣告文の取締●春畝翁出園●國銀行及宗教銀行●鷄鳴茅屋の圖
片々　●櫻痴居士●韻
週報　十數件

若松女學校設立慈善會能

會津古へより烈婦貞女多し、特に其戊辰變亂の際みには、多年の女粹を一時に煥發して、天下に會津女子の名を顯揚せしと大方ならず。抑も今の女子敎育は、ま、洋僻に流れ、日本固有の女德を無みするとなきにしもあらず、之を以て學深くして膽淺く、才大きやかにして氣力極めて小さき婦女子も亦少なからず、邦家の爲め歎くべきとと思はる。會津有志の人之を棄難きとし、文明の敎育を以て固有の女德を磨き、新舊を好く調和したる烈婦女秀才を新たに養成せんとて、昔し薙刀を揮ひ、劔を懷きたる同國の長老婦人未だ逝かざるに際し、若松女學校を創立せんとを企てらる。妹等其擧に太たく贊成を表し、玆に慈善能樂を催ふして其創業資に助けせんとを期せり。同志の人願はくは來觀し玉へ。

十一月三日芝公園能樂堂にて正午始晴雨共

能樂組 會主
海老名りん子
巖本かし子

能樂組

橋辨慶　寶生九郎
石神　梅若實
弱法師　福王繁十郎
墨塗　松本金太郎
猩々　福王繁十郎

津村又太郎　大倉利三郎　野村與作　森田登喜
洞村又喜　三須錦吾　野村捨五郎　一噌幸太郎
津村又太郎　下村又右衛門　増見仙太郎　森田登喜

擔當人　福王繁十郎
補助　増見仙太郎

當日切符受付ニテモ差出し申候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百三十七號 明治二十三年十一月一日發兌

社説

貴族的、道德論、矯風論

道德論甚はだ宜し、然れども貴族的道德論に至つては感服しがたし、矯風論素より宜し、然れども貴族的矯風論に至つては贊成しがたし。似而非君子、多くは貴族的の議論に流る、社會其論を聽きて善き事のやうに思ひ、あはれむべき平民を酷遇して、反つて一層大ひなる惡弊を見逃すことあり、吾人鼓を打て責め、鐘を鳴らして非を警告せずんばある可からず。

廢娼論の起るや、或人は云へらく、娼を廢せんとするは可也、然れども之が爲めに人の見聞せざる醜情を世間に曝露するは不可なりと。ある貴婦人はかゝる意見を以て美くしきことのやうに思ひ、新聞記者に向つて公言したり。其比ろ又の人云へらく、廢娼演説は至つてよろし、然れども之を會堂寺院に於てするは頗ぶる不可なり、之によつて神聖を汚さんことを恐ると、堂々たる一二の牧師僧侶かゝる事を揚言し、以て其の純潔を示さんとするものゝ如くありき。吾人かゝる言論を聞毎に、正直なる惡人を見るよりも尙ほ忍ぶことかたし、喩へばむかし聖人が姦淫を犯しつる婦人の罪を責めずして、口に善言を唱へて心肝よりも汚らはしき僞善者を容赦なく罵倒したることの如く、割然其面皮を剝ぎて衷心の下賤あることを暴露せんことを欲するに至る。憤慨禁じがたし。

西洋人の如く、多年交際に慣熟したるものは、交際上より來る一種の虛飾道德を製造し、最と小さきことを大層のやうに思ひて、つまらぬ事に潔僻を示さんとすることあり。かゝる謬見は殊に其婦人社會に多く、凡そ交際的の西洋婦人ほど役も無き事を氣にするもの殆んど稀れなり。先づ彼等が面前に於て腰と云ひ見よ、彼等は縮然として眉をひそむべし、更に股と云ひ見よ、赧然として顏を赤くすべし、更に姙娠と云ひ見よ、彼等は殆んど席に堪ざらんとす。吾人は彼等が眉をひそめ、顏を赤くし、席を立つことの、果して眞實ある道念より發するや否やを問はざるべし。試みに先づ之を眞實の衷心より發すと爲さん。然れども貴婦人よ、此の如き感覺はたゞ多年の習慣上より起り來りたる者にして、素と決して貴むべき程のものにあらず、腰と云ひ股と云ひ姙娠と云つて而して何等不純潔の連感を惹起さゞるに至りて初めて淸淨なりと云ふべ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し。柳下惠云く、我側らに祖裼裸躰すと云へども吾に於て何んかわらんと、經に云く、心のきよきものには惣てのもの佳ならざるなしと。感想純潔なるものに至つては、腰と聞かば希臘の彫像の何如にも美なるとを想ひ起し、股と聞かば英傑玄徳が厠上に於けるの慷慨を想ひ起し、姙娠と聞かば乙女マリアが清き聖氣に感じたるの古事を想ひ起すなるべし。苟くも然らず、此等無邪氣の言語によつて倚ほ思ひを邪路に走らすとせば、君等が心のうち何如にも汚らはしく、道德上至つて憫然なる心地のするもの也。左れば君等、もし衷心より左樣の感覺ありとせば速かに思ひを改むるに若かず。若又衷心左樣に感ぜざるも只だ習慣の禮式に隨がつて然なすとせば、日本人は決して左樣の事に頓着せざる故由を速かに會得し、向后安心して其の虛飾を廢するに若かず。

「國の基」と云へる女藝雜誌の新たに起るや、其主旨書中に明らかに我れ女學雜誌を攻擊し、「世には久しく女學の事を書き記すものもあれど、折々如何がはしき婦人の事をも記載するが故に、良家婦女子の讀みものとならず」と云ひける。蓋し女學雜誌が夙に廢娼論を記載したるが爲に若か言へりし也。而して如此き意見を懷くものは、啻に故の「國の基」記者のみならず、今や新たに西洋の交際風に慣れ、西洋婦人の虛飾におつき合ひせんとを心掛る上流の紳士社會に於ては、往々にして此の如き道德論を立派らしく主張し、士君子の面前に於てちとの汚らはしき事をも言はざるを特の外に宜しきとと思へり。然り、譯もなく汚らはしき事を言ふは、一種の猥褻なるべし、然れども其汚らはしきもの、四方上下に通流するとき、斷然之を除き去らんが爲めには則はち其汚らはしきものゝ事態を暴露せざる可らず。彼の所云る士君子は世に醜惡の事物橫行するを見ぬ振りにて見過し、若くは實際は常に之を親じみ、平常は之が事を談話するを、以ての外の好物と爲しつゝも、燕尾服、ボンチット、蹈舞、ピアノ、の出現すると同時に忽まち之を蛇蝎の如くに嫌ふの樣を裝ほふと、之れ豈に眞正の道德ならんや。如此き僞善者と彼の改革者とを較べよ、改革者が止を得ずして醜汚の事を暴露すとは、人をして此を惡ませんとて也、世より此を除去せんとて也。然るに彼の陽に之を斥ぞけ、陰に之を抱き、以ていよ〳〵社會の毒風を助長するものに比べて、豈に天地雲泥の差のみにして止まんや。ジヨセフヒン、バツトレル夫人は、英國に於ける廢娼論の先登者且つ大元帥なり。彼女遂に戰に勝てり、左れど彼女が

戰ひの苦しかりしは、必らずしも廢娼其事の成就しがたくありしが爲めにあらず、實に無數の似而非道德家反つて之を妨害したるとあるが爲め也。英國其比の貴族社會は、腐家の蜘蛛の巣の如く、煩はしき禮則を張り廻し、白晝立働らくと少なきが如く、たゞ虛飾の暗夜にのみ光陰を消し、些細の禮文に拘はりて巨大豪快の改革論を容るゝと能はず。之を以てバツトレル夫人が、巾幗の身を以て公衆の面前に立ち、彼の美唇を開きて娼家娼妓の汚らはしき事態を暴露するに會し、僞善家の驚ろくと一と方ならず。夫人を以て社會の道德を壞敗するものと爲し、教塲より說敎壇より八方より之を攻擊しぬ。左れど見よ、確かに娼を廢して英國全天下の空氣を清くすると、日に〳〵禮文虛飾にかゝはりて益毒風を助長すると、何れか美くしく、何れか淸く、何れか潔ぎよかりつるぞ。

之を以て、正直なる惡人多き世の中は尙ほ改め易し、僞はれる道德者多き世は至つて危ふし、大盜の悔ゆるや寧ろ速く、儒者僧侶の發心すると極めて六かし。かるが故に、眞正の改革家は、堂々たる惡風を見て痛むと寧ろ輕ろし、僞善虛飾の道德論を見るに至つては、肉動き骨枯れて心痛止まる所ろを知らず、其言行の往々之か爲めに過激となると或は之れあり。西洋人須からく基督が、パリサイ人を責め、殿堂裏の商人を逐ふの條りを讀味すべし。何如に過激なりし乎。

總じて如此き僻見を貴族的道德論もしくは貴族的矯風論と云ふ。たゞ飾らんが爲めに徒らの潔白を裝ふものゝ謂なり。凡そ平民の惡を爲すは尙ほ恕すべし、貴人の惡を爲すに至つては苟しくも容赦す可からず。彼等貴人は學問によりて相應の智識を得たり、又身富みて止むを得ず罪を犯すとも稀れあり、たゞ一身の榮曜によつて墮落し、事の道理を知りつゝ罪を犯かす、其の劣れること貧人愚民が知らず〳〵罪に陷いるの比ひにはあらず。左れば矯風家は先づ學者に向つて責むべし、先づ上流者に向つて責むべし、而して后ち平民に向つて淚を落としつゝ言ひ聞かすべし。然かるに彼の上流者の惡を后にして下流者の惡を先づ責むるの類、もしくは、下流者の惡を上流者に對するよりも更に嚴しく責むるの類、皆亦た貴族的の道德論に屬す。

故に吾人一流が社會を改良せんとするの志望は、少さか世人に異なる。ある人々は役者はな志家の仲間を汚はしきものゝ樣に言ひ、演劇に行とを以て地獄に墮落するとの如くに思ふものあり。吾人は如此き虛飾論に服すると能はず。夫れ今の演劇及び寄席は固より不都合の廉多し、吾人亦夙に之を嫌らふ、其嫌ふの情に至ては決して人后に立たず。然れども演劇及

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

び寄席の汚らはしき者を嫌ふの情は、たとへば小説、文章、音樂、彫刻等の汚らはしきものを嫌ふの情と左して徑庭あるなし、均しく是れ美術上の欠典として均しく之を改革せんとを希望するもの也。之を以て小説、音樂、文章等の改めざる可らざるとを主張すると同時に、劇場及び寄席の亦た改めざる可らざるとを主張せり。故に汚らはしき小説を讀む勿れと云ふとの如く、汚らはしき演劇を見る勿れと云ひ、聖き小説の出るとき之を紹介するとの如く、淸き演劇あるとき之を見よと言ふとを猶豫せず。之を以て今の小説家一類の中に好き人を見出せば固より之を友となす、如斯く亦た今の役者及びはなし家の中に好き人を見出すに於ては、千里を遠しとせずして交はりを結ばんとを欲す。抑も吾人が眼中には職業に善不善醜不醜の別あるとなし、たゞ之を行ふの人物何如によつて之を判斷差別するとある耳。

左れば吾人は夙に演劇改良論を唱へ、又演劇の評を掲げ、又一二の俳優を賞揚せり。其都度嘲を寄せて譯も分らぬ道德論を送れるものもありと云へど、吾社中の同志者は一切之に服するを能はざりし也。義人は總理大臣となりて民の膏血を私しするよりも、役者となりて淸く義人の言行を換すの立派なるに若かざるとを信ず、又狐の如き演説者となりてウソのみを表白する民權演説家よりも、正直にして古代武士の事を演ずる講釋師はなし家の潔ぎよきに若かざるとを信ず。啻に吾人は如此く信ずるのみならず、彼の役者藝人等は世間より格外の輕蔑を蒙むり、不當の低價を以て冷遇さるゝとを氣の毒に思ひ、又もし如此くにして止まずんば彼藝園に人物の入り込むと長久に尠なく、隨がつて其藝園はいつ迄も下賤にてあるべきとを思ひ、何如にもして之を救ひ、其地位を高めんとを願へり。故に上流貴人に交際せんよりも如此き社會中の善人物を見出し、之に結托して其品性を賞揚せんとを欲するや久し。吾人が女流改革者に向つて、「公等また女俳優となれ、頸を伸して待つ、足を翹てゝ待つ」と云へりしもの、必竟亦此の類の微志のみ。

近ごろ婦人矯風會が、能役者を雇ひて芝能樂堂の慈善會に演藝せしめたるを奇怪の事と云ひふらし、特に或る西洋婦人の如きは、能役者はすでに役者と號す役者なるが故に宜しからずと主張するものすらあるよし。吾人は矯風社會亦た悲しむべき虛飾者を生ぜんとするの兆を察し、慷歎長大息せずんばある可らず。吾人は信ず、俳優に於ては市川團十郎氏の如く、落語家に於ては圓朝子の如く、講談社會に於ては劉多の俠骨ある講談師のごとき立派なる人物は、大政事家大民權家大矯

風家の腐敗したるものよりも優る數千等なりと、况んや彼の起居肅として禮あり、一音を發するも尙ほ靈聲あり、神を清まし魂を高くして而して純潔の舞を奏づる能役者に於をや。吾人は此等藝園中の善人物に膠漆の交を爲すヿを得、虛飾僞善の友と一日も相語るヿ能わず。

眞雄辯

ロンジアス云へらく、奴隷に大辯士なけん、壓制國に快雄辯あけんと。此の言眞とに實なり。左れば、吾國の未曾てデモスゼニース、又はパトリック、ヘヌリーの輩らを出さざる所以聊さか諒察するヿを得、常に歎かわしきヿに思ひ居たり。明治十二三年以來、演說と云ふヿ連りに流行し、苟くも腹に一物あらんほどのものは言ふに及ばず、左して心得なきもの迄、われも〳〵と演說を試み、諸君よく〳〵の發音は、田舍小學校門前の雀の囀りよりも喧しましきに至りぬ。吾人屢ば之を聽聞して數度び嗟歎し、遙かに西天を望みて長大息したるヿ幾度と云ふヿを知らず。あゝ之れ演說かと。

然れども亦思へらく、言論不自由の世の中に於ては、勢ほひ斯の如くせざる可らざるヿもあらん。然りと雖ども、噴火山下の火は、山燒の焔よりも熱烈にして、言はぬは言ふに益す所ろの餘憤なくんばある可らず。文天祥敢て復た言はず然れども其慷慨は宗盤が哀みを請ふの比ひにはあらざりき。言論不自由の時代に於ける愛國愛民の志士は、未だ如此き辯說を以て滿足し得べきものにあらざるべしと。

近年政府の仁、度量を豁開して、春風の如く吹き渡り、政談講話の取締り方、至つて手軟らかくなりぬ。今日此頃ろは志士が演說も定めし上達せしヿあるべし、もはや昔日の如く、喪家の狗こわ〳〵ながら吠え、乞食食を得ず顧みて罵しるが如きの劣躰あらざるべしと思ひぬ。依て一二の演說會に傍聽したり、中にも、大演說と云ふもの若くは大年會と云ふものなどに臨み、辯士が鬱勃不平の言語を、何如に物すごく吐發するかと聽聞したり。

吾人は今に於て悟りぬ。ミルトンの云へらく、大凡そ眞理なき所ろに雄辯あらじと。ジョン、ブライトが赫日を睨み、銀月を泣かしむるの靈舌も皆な眞理を確信するの肺囊より活動し來るヿぞ。あゝ、日本今日の雄辯なきもの、安んぞ自由なきが爲めならん、たゞ眞理あらざるが爲めなる耳。吾人彼の演壇に立てるものを見るに、宛がら講釋師落語家の如し。もしくはフロックコートを着、金鎖をかゞやかし、か

くしに手を突込む所の一種の木偶人なり。俗輩一禮既腐レ心。其の立つ所ろの足浮み、其安んずる所ろの躰すでに死せり。彼等は未だ初より何等の言はざるを得ざるの腹稿を有せざるものなり、否な或は之を有すべし、其有する所ろのものは、紙に書きたる草稿のみ、未だ心に刻み、膽に彫り、全身に透徹したる一大切要の時事定案を有するにあらざる也。左れば、彼等は一席の茶話を辨じ、聽衆より多少の喝采を博し、辛ふじて其務めを畢れば、目的全く了る。彼等が演說の主旨は、演說するの時當時にあらずして、其前後にあり。即はち止を得ざる義理立前にあり、名譽賃錢後ろにあり、たゞ此等前後の黄金虛榮を得ば則はち其能事了る。之を以て、其先づ演壇に登つて一拜するや、諸君暫らく御辛捧下されよと祈るが如く頼み、漸やく圖に乘つて辨じ了れば、有がたかりしとおわびを言ふが如くにして降り、而して其中間は只だ、滑稽と、世辭と、法外に自から謙すると太皷持の如く、一二の拍手によつて乍ちに勇氣のつくと噛合ひの犬の如き耳、何ぞ其醜躰なるや。公等もし思ひあらば、何んすれば、不平欝勃、言はざれば止まず、言へば動かさゞれば止まず、動かさば成さゞれば止まざるの決心を以て演壇に立たざる。既に演壇に立てり、既に意見を吐露せんと欲す、此時に於て何の言譯と何の容赦とを要めん。聽く所ろのものは聽かんと欲するもの也、言ふ所ろのもの安んぞ肝膽を吐白し去らずして止まん。聽衆よ、國民よ、同胞よ、公等彼處に注意すべし、公等此處に注意すべし、公等吾が言ふ所ろに聽け、我等の日本には今ま此の大危急の事ありと辨告す。而して確信確認、一語も飾る所ろ詐わる所ろあるなし。此時に於ては、何如なる吶辨と云へども、快辨とあらざるとなし、よし吶辨にして遂に吶するとも誠意十分に貫徹す。演者が演說する所ろ遺憾なし、聽衆此に於て必らず多少の益を受くべし。苟くも然らず、耳を以て聽き、口を以て囃し、手を以て調子を取り、辨者之に應じてアヤツリ人形の如く、目をむき、躰を動かし、空膽洞々、カナギリ聲を發し、勇氣なくテーブルを一つ二つ叩きたりとて、塵すら安坐して飛ばず、天地何すれぞ動かん。吾人は、今の演說者が、胸案胸に塞がり、腹ふくれて禁じがたきに至る迄は、決して演說せざるとを希ふ、輕々しく鳴かず、鳴けば必らず聲九皐に達せんとを希ふ。今の演說家は、聲色つかひのみ、太皷もちのみ、講釋師のみ、はなし家のみ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜録

日本繪の歴史概畧（二）

末松謙澄

次に住吉と申すは前に申す通り土佐の中から別れたので御坐います住吉に慶恩といふ人があります是れは光長の弟で此人が住吉の一派を創めました其後住吉家は久しく絶て居たが舊幕時代になりて廣通といふ人が繪を良くかいて將軍の思召しで昔しの住吉の繪が絶へて居るから繼いだらよからうといふので住吉を名乘りましたそれからして「廣」といふ字が付く住吉家の畫工が澤山出來ました。

又鳥羽繪といふのがあるあれは鳥羽僧正といふ坊さんから初まッたので鳥羽に居たから鳥羽僧正といふ此坊さんが繪が上手で時々諧謔た繪をかいて世の中を馬鹿にしましたそれより諧謔繪を鳥羽繪といふこれも皇代の人で御坐います僧正は七百余年前の人です其後藤原信實と云ふ人ありて尤も人丸の像に妙を得たり此人の名も知らずてはならず此人は六百余年前の人なり。

次ぎに足利時代になッてからの有名なる畫工の事を申しませう即ち足利義政公前後のことて御坐います此時代に一番名高い人は雪舟で御坐います此人は日本にて繪では一か二かと云ふ人で雪舟と元信は先ッ日本に於ての大家で御坐いますそれから啓書記と云ふ人が御坐います此人の本名は祥啓といふ鎌倉の建長寺にて書記役を勤めて居たる所より啓書記といふ此人は繪が上手で山水も良く書き人物も相應に畫きました人それから名高い人は兆典司といふ此人は京都の寺院に居て典司といふ役を勤めて居ッた故に兆典司と云ふ其本當の名は明兆といふのでありましたが明の字を略して兆典司と云ひました此人の畫いた繪は多く西京邊の寺に在りますが中にて最も上出來のは途方途徹もない大きな一丈何尺とか二丈とかの涅槃の繪だと申します此人の名を覺へて居るとお爲になりますそれから如雪と云ふ人があります如拙と書いたのもあります此人の繪は至て稀で御坐いますが此人も坊さんだが其來歴は能く分りません或は唐から來た人だといふ說もあり又九州から來た人だといふ說もある其書いたもので今日まで遺ッて居るものは誠に尠ない私は正物か僞物か慥には分りませんが此人の書いた三幅對を持ッて居るが荒ッぽい繪で御坐います此人に後れて出た小栗宗丹、周文、狩野家などは大抵此人の流を汲みました此等の處からして此人は日本繪の歴史に取りては大切

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の關係ある人です如雪の次ぎに周文と云ふ人が居りました此人の繪は今にも多く殘て居ります奇麗な山水で唐風の山水をかきました花鳥もかき墨繪も書いたものがあります或は越溪周文ともいふ名高い人で大抵四五百年前の人で御座いますそれから小栗宗丹といふ人も居りました此人もなか〳〵名高い人で此人の書いた私の藏幅は此間の博覽會に出して置きました宗丹の子に宗栗といふ人もあつたが此人も繪が巧手で御座いました。

此頃又能阿彌、藝阿彌、相阿彌と云ふ親子三代續きの人がある今の人は阿彌といふとを滅多にいはぬが尾州邊では阿彌娑娑などいふ字の付いた名が今でも幾らもあります此三人は少しヒチクッた時は阿彌といはずして「眞」の字を付けて眞能、眞藝、眞相といひます此人は足利家の家來で茶道もやッて三代とも繪を頁くかいた人であります其ころのに曾我蛇足といふ人が居りました此人も有名です。

それから雪舟です此人は子供の時に足で鼠を書いた處が其鼠が起ッて逃げたなどゝいふ話さへもある此人は唐に渡ッて唐土でも名を得ました弟子も澤山あッて繪も余程書いたと見へて今でも此人の書いた物は誠に多く殘ッて居ります勿論僞物も多くありますがこゝに掛けてあるのは雪舟の書いたので御坐いますこれは七賢人の片砕れです何んでもかういふ物を書いたのは雪舟流だと思へば宜しい又かうゆふ風であい奇妙なのがあります何だか分らないかういふ物を書いたのは雪舟流の繪ですこゝにあるのは雪舟の門人の秋月といふ人の書いたのでは御座いますが矢張り同じ流義です雪舟の一名は等揚と申しました印などには等揚と書いたが多いやうです又此人周防の國の雲谷寺といふ寺に居りましたそれを自分の氏のやうにして雲谷等揚といひました隨て雲谷派といふものがありますが即ち雪舟から出たので御座います今申した通り雪舟が等揚といふたから雪舟の弟子は大概「等」の字が頭に付いて居ります「等」の字の付いて居るのがあれば十の八、九、は雪舟流の人で御座います雪舟の弟子に秋月といふ人がある此人は師匠と一所に唐に行ッたとがあるより此人の畫には多く入唐秋月といふ印が押してあります此人も本名を等觀といふ又秋月の弟子に等碩といふ人もある是等は總て雲谷派と申します雲谷派では雪舟、秋月等最も有名です狩野の先祖は大抵これと時を同じうして雪舟の少し後の人で御座います。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

近時教育の大欠點

もみぢ

物足らぬ心地のするは今の教育にてありける。一つは飾りに流れて役に立たず、一つは實用に僻して何如にも殺風景なり。彼は人間を五月のヒヽナの如くに取扱かひ、此は無感覺の木偶を持成すに異ならず、共に靈性ある高尚の人類に適して滿足なること能はず。人生最大の幸福は、宗教上と美術上とより來る。若し精神歸着する所ろを得て魂しいに安きを得ずんば、成功立身も物の數あらず。たとひ又た錦を着、珍味に厭くとも、高傑なる美術上の天性を滿たさずんば、心自から渇することを覺ゆ。左れば人の靈能を發達するを以て教育の本旨とせば、此等宗教上及び美術上の所願を伸ばし、之に滿足を得せしむるの趣向亦た備はらずんばある可らず。われ當世の教育を見て常に此點に慨げく。

磯のふで草（三）

田邊花園女史

十七日の朝ひるげ、ものして、宮のしたより、木賀にいたる、道すがらの瀧、早川の流れなど、あかぬ處に、多かれど、いそぐ旅なれば、見過しつ。

前になり後になりて瀧の音はのほる山路をはなれざりけり

はこね山おちくる瀧をかくながら都のつとにせまほしき哉

木賀にやどりて、ゆふげ、たゝふ、程ちかき宮城野に蕎麥の、名物ありとて、とりむかと、色くろく、都のにくらへては、よつかほどを、一つにもりてあれば、見るより、きみつをくへておほゆ、おのれと兄君は、まけじたましひに、一つを盡くしたれど、のちには胸わろく、堪がたきを、しか人に見せさらんとするも、いとくるし。十八日の朝とくより、大地ごくへとて、立出つ、白き浴衣に、わら靴はきて、竹の杖つきつゝ、山又山を、越へ行くに、おのれも、あゆみなれて苦しともおほえず、午頃大地ごくへのぼりぬ、いつの頃にや、皇后陛下こゝに行啓ありて、開けゆく世に、ふさはしからぬ山の名なりとて、大涌谷と、名づけかへ玉ひしと、供ある男がたりぬ、實に足もとより、ドロ〳〵と、鳴神の如き、音して、湯氣の吹たつさま、おそろしともおそろし、おさなき頃、人のかたり聞けしを誠とおもひし心くせに、地ごくてふ名の、何とあくおそろしうおぼゆるも、我心ながらをかし、山はみな硫黄のみにて、地皆黄にて、生ふる木もなし、草は、薄などの、穗に出たるもあまた見ゆ、立すめば、足いとあつく、

堪がたき處ぞ、多かる、こゝの土を、田に入るゝ時は、稲のみのりよしとて、堀もて行人々、多かりとぞ、こゝを過ればうはことといふ處に出づ、こゝにてひるげしたゝむ、飢たるはこよあき、料理人ありとの、西の國の諺、けふ思ひあたりぬと、いとこの君のたまひぬ、この家の湯は、廣くて、明礬の氣をふくみ、清しとも清し、眼を病む人々によしとて、あまたくる人ありといふ、こゝより湖水を舟にてわたる、水清くきしの木々、倒にうつりて、底につどへる魚もみゆべく、空も青うすみわたりて、げに水や空と、まどふ計ありき、八月の望の夜に、舟うけて遊びけん、から人も、かくやと思ひ出て

かつうたひかつかたりつゝ異國の其夜おはゆる舟のうち哉

同じくは、月になどおもふも、かの蜀をのぞむといふ、人心なめりかし、しばし、あなたこなた見るうち、舟動き、波立、風わらくなりて、山より白雲涌が如く出て、空にのぼると、見る／＼、夕立さと降出ぬ、風さへ加はれば、かさもさしあへず、赤き毛布の、ちひさきを、六人のかしらに、うちかぶせて、ひとつによりゐぬ、舟は元箱根とふ處に、つきたれど、雨いまだやまず、舟よりおり立て、ある家にいたれば、おのれの下に、重ねしあかききぬ、うへの白ききぬの、雨にとゝぬれしまゝ、しみ出て、雫の血のごとく、したゝる見るも心地あしけれど、かふべききものなければ、雨の晴れ間をまちて、さらに、わらくつかへなどして、こゝを立出たり。

奴の小万

天知子

民間一歴史上に俠客の時代ありて一種の特氣を吐けり、喧嘩買ふと街衢に喚び歩きし「鎌輪ぬ」服裝の髭男より、漸く進化して權吏を凌ぎ民權を伸べ、犧性獻身に近より來りし銀否髷一流の俠客を生じ來りぬ、其一種の特氣は妙に女流間に侵入して往々奇嬌の婦人を出せり、浪華嶋の内の藥屋木津屋五郎兵衛の娘に雪子と言ふあり、伶俐にして俠氣ありけるが、十六の時天王寺に參詣せしに、兩人の曲者雪子の櫛笄を奪はんとせしに痛く是れを懲して神色自若たり、是より其勇名高くして時人奴と異名して賞贊せり、其頃俠客は多く町奴の徒ありければ俠者の事を奴と言ふなり、此評判の盛んなるより豊竹座の操芝居にて奴の小万といふ俠女を演せり、之より雪子を小万と唱へたりぬ、雪子は又文學を好みて一の風流才女たりと、殊に和歌俳諧を好みて梁田悦幾の門下にあり、常に日へらく、吾家は三好長慶の後裔なりと、後遁世して三好正慶と自稱するに至れり、彼女は正しく現今壯士的婦人の一流

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

には非ず、彼時代に喧嘩を喚びし松脂髯一流の野獸にも非ず、女流として少しく豪放に過るを咎むる者あれども常に然る風義なりしには非ず、唯彼女の遺憾とする所は栁里恭といふ人と契りて其妾とありし事なりし、是れとても色を賣り色を悦びし如き類には非ずして淸き德を汚すの力ある可らず、馬琴翁は彼女を一層高き理想に組立んとて頗る熱心の筆を掉ふたり、翁が望を屬せし女丈夫なりし事を知るべし、そは奴の小万を耶古の姑磨姫として甞て一道の光彩を放ちし、開巻驚奇俠客傳を見よ。人あり女子の特色を失ひし擬男兒ありと非難せば我れ又何をか言はん。

看護婦の資格

香軒生

健康、克己、信實、淸潔、明察、精密、節制、秩序、從順、溫和、硬直、美聲、美風、是を看護婦に要する資格となす、人或は云はん、是を悉く得ば眞に完全無欠の人なりと、吾人は答へん、否決して之を得るも圓滿の人と云ふ能はず、尙他に欠くる所少なからず、人此世に在つて完滿なる能はず、只上に擧ぐる所の資格は當に勉めて得べき所と云ふのみ。

○信實　人眞に信實なるは難し、其信實を人に知らるゝは更らに難し、信實を內に備ふるも人容易に之を認めず、されど人の看護を爲すもの宜しく堅忍以て其信實を示し、過ちを見ば公明に之を正すべし、信實ならざるが故に弊害の起る事多し、愼まざる可からず。

○淸潔　看護婦たる者宜しく萬事を淸潔ならしむるの美風を養ふべし、殊に外科に用ゆる諸器具の如き、最も淸潔を要す、病根多くは鎖末の小事に潛む、故に平常心して淸潔になすの美風を養はざるべからず。

○精密　患者に係はる諸般の出來事を視察し、且記憶するに精密なるを要す、時に腦力弱く、視察密ならざる時は過ちを生じ易し、患者は如何と問はるれば「快げに眠れり」と云ふが如き曖昧の答を爲すはよからず、如何に眠りしか、精密に記臆する事大切なり。

○節制　時を計り、精密に事を處する最も必要なり、即ち時に從つて爲すべきを爲し、制規を誤らざる事なり。

○秩序　秩序を正しくするは實に好風習にして甚だ得難きものあり、されど是亦看護婦になかるべからざるの資格と云ふべし、秩序整然たるは自ら患者の心を快くなす。

○從順　心中窃かに從順なるべし、心づく事悉く爲し得べから

ず、其爲すべきは從順になし、爲すべからざる事は决して爲すを要せず、看護婦の患者に接するや、其知らぬ所は之に教へ、病に障はるが如きは爲さしむべからず、器械の如く唯々諾々患者の云ふに任すあらば恐くは大禍を惹起せん。

温和　患者に對して温和なれ、温和とは猥りに患者の言に任かする薄志弱行の謂ひに非ず、眞に温和にして看護婦一度信用を得ば患者よく其言に從はん、されば温和なると同時に硬直ならざるべからず、之に加ふるによく見るの明とよく聞くの耳とを要す、即眼と耳とは鋭敏ならざるべからず

始めに忍ぶべし

看護婦たるの始め、床上に苦呻するの患者に對して日を終へ、病蓐に痛吟するの不幸者を慰めて夜を徹するを見て甚だ堪へ難きの任と思はん、されど何時も斯くあるにあらず、始めは院内の掃除蕩塵に日を過すを常とす、斯くて漸く慣るゝに及びて看護を爲すに至る、其始めに忍びて看護婦の資格を養ふに誤る勿れ。

自養獨修。

看護婦が平居病院にあつて心得べき事多けれど悉く擧ぐるに遑あらし、終りに一言すべきあり、即ち看護婦たるもの自ら智を養ひ、獨り識を博ふするにあり、自ら教師となつて自ら教ふるにあり、學校に入り、教師につきて學ぶ所多くは實用に適し難し、只々患者に接し、病人に對し、自養獨修の功を積みて以て看護婦の資格を養成するを可とす、重要繁劇の職、豈數年の短日月に於て學び得可けんや、人學ぶ事博ければ從つて無智あるを感ずる事多し永く耐へて修得する所あれ、醫師異れば其看護の法亦同じからず、看護婦宜しく醫師の命に從つて任を盡すべし、機械の如く一の境遇にのみ適するはよからず、要するに看護婦は懇切沈着の風習を養ひ、常に上帝の祐助を仰ぎて以て其重任を盡し、肉身の患を治すると共に靈神の病を除かざる可からず。

某横字新聞に掲げし看病婦の事、切要の事項なるが故に斯く摘訳しぬ、實に看護婦は光榮の務めにして女子の適任と云ふべし、近來我國に於ても漸く此任に當るもの多きを加ふと聞く、國家の爲めに賀すべきの至りとす、吾人は愈女子が奮發して此榮職を負はれん事を希望す。

コロムバスを動かせしもの

かすみ

コロムバス何によりて彼の大忍耐を爲しつる乎。或人は云へらく、黄金國を見出さんが爲めなりと、又或人は云へらく、浮世の譽れを得んが爲めなりと。然れども、凡そ大なる事業

を成就したるものは、深き心に最と眞實ある所ろあり、切に民を思ふの誠意によりて動くことを常とす。リビングストンが亞弗利加に入り、スタンレーが蠻野の内に侵入し、ゴルドン將軍が一生を九死の地に投じたるの類ひ、皆な大眞實の精神ありて存す、たゞ俗世の榮譽、肉皮の幸福を求むるが故を以て、かゝる剛膽烈情を振り起すこと能はざる也。斯の如く、コロムバスが發明心を促がし、之が大辛苦を忍ばしめたるの動機は、亦實に彼が皮肉形骸の上に存せずして深き靈魂の底に存す、其のイサベラ及びフハーヂナントに呈するの書狀によつて、其趣きを認知することを得べし。

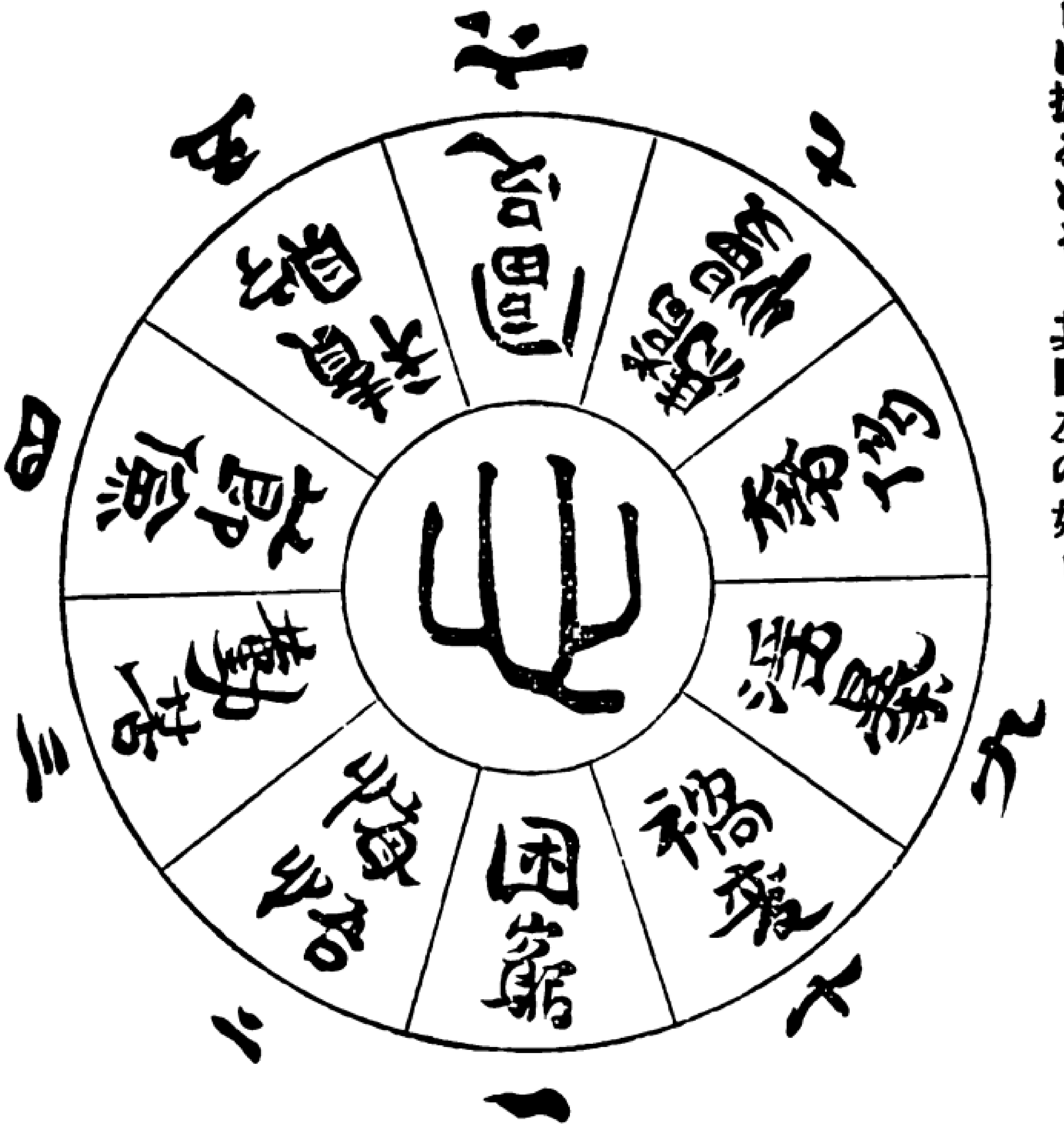
新島襄先生未亡人の談話（二）

新島先生幼時の約束　新島先生は、幼時より、約束を、重んずる美風あり、是れも先生が、十一歳の頃の事とか、劍術の師匠許にて、試合ありけるに、先生は何とかして、同輩に勝ちたしと思ひ、摩利支天に立願せられ、果して此の試合に勝たば、御百度を、あぐべしと、誓はれたるに、首尾よく勝ちおふせたり、爰に於て先生は、直ちに紙捻百本を拵らへ、之れを持ちて、摩利支天の、社へ馳せ行き、約束の如く、百度廻られし由あるが、其の後屢〻人に語りていはるゝやう、摩利支天との、約束には、實に懲り果てたり、紙捻百本拵らへるは造作なけれど、百度廻りは、隨分、めんどうなりし、爾後斯の如き約束はなすまじと、果は笑ひ話しの、一つになりしとぞ。

新島先生幼時の執拗　先生が七歳の時とか、始めて漢學の、先生許到りて、經書の句讀を學ばれたるに、先生殊の外物覺惡しとて、太く頭を叩かれたる爲、憤に堪へず、歸りて床の間に、書物を擲きたる儘、其前に平伏して、太く打泣かれたり、先生の父君之れを見て七三、何を泣き居る乎、と尋ねられしに、先生告ぐるに、師が自分の頭を、打ちたる事由を以てす、父君いはるゝには、其を何の憤る事がある、却て先生の許へ、御禮に行かねばならぬなり、先生は、汝が覺へても覺へないでもよいといふ、思召ならば、汝の頭を、打ち賜はざる可きも、汝をして、記臆、能き人とならしめんと、欲し給へばこそ、頭まで打ち給ひしなり、今より予が伴ふて、御禮に行く程にとて再三促されけれ共、頭を打たれて、禮に行くものやあるとて、如何に强ゆるも、遂に再び、其先生の許へは行き給はざりしとなむ。

○守田寶丹翁立身秘訣

寶丹翁守田氏は、元治元年の頃より、銀六十四文を以て身を起し、今の地位に登りたる人あり、其の富を起し身を處するの秘訣は、身家盛衰循環圖と云へるを手に入れ之を敬則と爲せしに據るとぞ、其圖左の如し。



事業の成否、女子多く失敗する耶（下）

文明愈々進み、女子の價値益々顯はる、教師、新聞記者、雜誌記者等の社會に於て女子の分子愈々多を加ふ、而して世人の之に注意し、其記述する所大いに好讃せらる、男子之を見て其占有の地位を奪はれしと、猥りに憤怒するも遂に何の功かあらん、只其品位を害するのみ、

ガイルデル孃

ニウヨークに「批評」と題する一雜誌あり、是が主筆をゼーネットガイルデル孃となす、孃嘗て曰く「妾の父は獨學によつて智を研き、識を蓄へ、遂に新聞記者となれり、妾亦其性を傳へ享け、十四歳の時一書を著はしぬ云々と孃幼にして某日々新聞に寄稿し、併せて音樂上の批評を書して同新聞に投せり、世人が所謂「女子能ざる所」をよくなし遂しを以て大ひに喝采を博ふし、其地位漸く進みけり、孃次で「ニウヨーク、トライビェーン」、「スクリブナース、マガシン」、等の通信員となり、亦「ヘラルド」新聞の文學評論の記者を兼たり、千八百八十年に於て、「批評雜誌」を發兌せり、今や其基礎固く、其功著るし、

ボストンなる「女子新聞」の主筆ブラックウエル女史云く、新聞の業、易からず、されど其勞に報ひあり、所謂「面白き」事業なり、其必要切にして其任重し、されど女子之を職業となさば便益多からん、其最も要する資格は、正義、溫厚、慈善の心を養ひ、殘忍酷薄の念を絶つにあり、女史は決して記者の任を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「掠奪」するものに非ず、生れながらにして記者たるの資格を備へたり、能なく藝なきの男子空しく記者たらんと望み、徒らに惡口暴語以て女子を賤しめしと雖も素より女史の進路を害する能はざりき、女史は母の敎育よかりし爲め疾く記者の位置に進み、以て女性の能力を示せり。

ハルローウエイ夫人

幼にして大頭領ジヨンソンの一家族と交はり密なりき、故に常に賓客となつて「ホワイトハウス」に招遇せられたり、此時材料を得て「ホワイトハウスの貴女」と題する名作を著はしけり、其後「ユニオン」新聞の記者となり、次で「ブルックリン、イーグル」新聞に主筆となれり、此任にある十有三年、歐米漫遊の途に上るに當り、記者の職を辭せり、其後種々の書物を著述して大ひに世に名あり、同夫人幼年の時より新聞の記者とありしかども論者の所謂「女子は記者の任に適せず」と云ふの非なるを示すのみ、夫人は眞に生れながらにして新聞記者たるの資格を有せし人と云ふべし。

リ、アンホアイティング女史はイリノイス州の一僻地、農家に生れたり、勵精克苦の末遂に名光、火の如く輝きぬ、昨は茅屋の賤の女、今日は「ポストン、トラヴェラー」の主筆、其位地の變易豈に甚だしからずや、今日は是驕傲自慢のボストン府民も腰を屈し、頭を垂れて女史に尊敬の意を表す、其名望の著るしき以て知るべし。

ハウシユ夫人今はブラットゥルボロの女子新聞に主筆たり、夫人は僧侶の一女にして幼より書冊堆積の内に養育せられたり、未だ某女學校を終らざるに新聞記者となり、千八百七十六年に於て更に一雜誌を發兌せり、人若此雜誌を一讀せば必らず、女子が新聞記者に適せずと云はじ。

ボストンにメリアン、マックブライド女史あり、亦新聞記者として名聲海內に轟く、千八百八十年ボストンポースト新聞社に入り、製造、工藝の事を記述せり、女史始めに其任の重きを感ぜり、されど注意專心以て孜々其任を盡し、よき資格を養ひ得たり、後女子獎勵會を起し、女史の能力は只に家庭を治理するに止まらず、一層高尚の事業を爲し得るを證せんとす、思ふに將來爲す所世の人目を惹かん。

マックブライド女史の言

女史曰く婦人にして新聞事業に當らば須らく私心を去り、慾情を捨て、公明正白なるべし、されば世自から女史が新聞記者に適するを認めん、或人曰く「女子は公共の判斷を爲すの心膽

し」と、されどハントヂヤックソン女史の正言直語は遂に大國々民が赤色人種に對するの政畧を變ぜしめしに非ずや、是實に女子は正義の念强きの明證と云ふべし、誠に女子は文明國の眞心なり、正義の念は女子の長所あり、金城鐵壁なり、生命なり。

女子の詩人

女子にしてよく詩歌を作るあり、人或は其意外なるに驚かん、されどブラウニング夫人の如き、ヘマンス夫人の如き、亦メーリイ、ハウエット、メーリー、シー、エームス、ジユリア、ハウ諸女史の如き皆著名の詩家なり、世上許多の文人雅士彼等の著作を稱贊して止まず。

要するに女子は新聞記者として愈世に顯れんとするが如し、されば後世今の人僅に名を青史に止る時、今日の國民只記臆に殘るの時、今日の人其腦力を盡せし建築、市街、村落、悉く塵土に歸するの時女子の光榮は赫として歷史紙上に輝き渡らん、吾人は此時あるを確信して待つ者あり、論者何女子の能力を蔑視するか。

きよめぬ庭

其二十九　洒落齋主人

彼岸

明治の始めつかた、後には大臣の位までも昇りつる何某の君（木戸公ならん）と云へるが、書生のさまにて歐洲に到り、政事むき、或は學文のことゞも取調になんありかれける。時に物理學の博士とて名高き人ありけり、某いかほどのことと云ふものにや索ねみんとて、或日從者一人供して彼の家に到り、日本の留學生何某、御目にかゝり度しと通ず。此方に來ませとて、一室になん招じける。某彼の博士を見るに、年の頃五十餘りをすぎつらん、いかにも學者らしふこそ見えけれ。時にかにかくその話のうちより、博士の云ひけるやう。聞說君が故國日本にては、近頃にいたり、何千年來用ひ來りたる、大陰曆を廢し、換ふるに大陽曆をもてせられしよし、そは事實にや。と問はれ、某いかさまかゝるよし聞及べり。と答ふ。博士此は大なる過りなり、いかに人民の不便を感ずることあらん。そも日本國は、古より農業の國にして、國の基を農によりて立つ、されば政事のくさ〲、ことに曆のごときものも、ことさらに農事に便よかるこそよけれ。歐洲にて大陽曆を用ゐる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

こと、そも其理由あり。天動地動の説も、未だまつたく確定したるものにもあらじ、されど大陽暦は地動の説に倣ひ、其昔より航海の業によりて、立つところの國多き、歐洲のことなれば航海者に最も便利を與へんが爲に、作りしものぞかし。そを心なの日本の政事家が、いかにみずからの國に、何事にまれ標準と云へるものなきにせよ、農をもて立ちたる國に、航海の業にいと便よかれとて作りたる、大陽暦を其儘に移し用ゐるこそ心得ね、君の國人はいかにそを心うく思ふらん。とていたく云はれけれは、某も其辭のいと道理あるに感じられけるとか聞及びぬ。博士の辭實に一理あり、我國の如く何事にまれ、標準と云へるものなしとて、淫りに外國の物を移し來らんには、此の未だ開けざる蒼生の上に、いと開けたりと云へる法ども、いかに感ずらん。或は冷水より出たる身體に、熱湯を灌くこゝちぞもせざるか。

早苗植ゆる頃ありけり、草取る男の、田の溝にて、ふと大なる鯰をなん見出し、逃んとするを手早くとり押へて、側にありつる馬盥に入れたり。其鯰はいと大なるものにて、馬盥の中に在りつゝ、そが尾は三寸餘りも曲りけり。男どもいたく悦びて、夕にはそを料理なし、茶毘饌の下物になさんとて、そがまゝにおきつ、己等は程遠からぬところに、茶釜しかけたる林に、晝餉にあん立けり。かゝるところに來かゝりたるは、田舍廻りする魚賣りなり。ふと道の傍ある、馬盥の中を見れば、目ざましきほど大なる鯰あん居たる。魚賣り思ひけるやう、かゝる珍らかなる大鯰を、百姓どもの舌にかけんこそものをしけれ、幸ひ人のおらねば、我之をとり行きて、市にひさがんには、とて己が飯臺と云へるものゝ中に入れたり。二足三足ゆき行きけるが、ふとこゝろづきて、他人のもの無代とりゆかば、余も盜賊なれ、その價をおきて、とり去るに如かじとて、元の所に歸り來り、錢とり出さんとして、飯臺を開きみれば、塩漬の鯖五つ六つあり、こはよきものかな、魚の價に魚を出すもおもしろしとて、其鯖を馬盥に入れて行きけり。今しも晝餉すましつゝ、歸り來りたる作男どもの、盥の中を見れば、大鯰は何地行きけん影だにとゞめずして、塩鯖の五つ六つ其所にありければ、そは大鯰の價にとて、魚賣りのおきしものとも思はず、ひたあきれにあきれ、大鯰は何所のか主と云へるものにて、我等のとりしを慍りて、塩鯖と化け給ひしものなめれとて、その塩鯖食ふ可くもあらず、田を埋め、溝を潰して、そこに一の祠をたて、鯰大明神を勸

請なし、信心に來る男女ひきもきらず。ほどもあらず前の魚賢田舎を廻り、かの田の邊に來り、大鯰をとり行きしは、此邊なりけりと來たり見れば、早苗植ゑかけられし田は埋められ、小さき祠の建られ、幟ども立つらねて、鯰大明神と崇められありしに、ひたあきれにあきれけるとなん。

剛毅朴訥は仁に近しと、孔子の云はれしは、何れのことなりや知らず。開けぬ農夫等の智識、げにさもこそありけめ。地は全じかりしかきゝもらせしが、似よりたる話あり。頃しも秋はまだ淺く、七艸の錦織り初られしのみ、愛嬌づきてこぼれかゝりつる萩のみいとうるわし。返へり咲とか云へる桃櫻の、此方彼方の梢に、一つ二つ咲出たるまゝ、おどろける風情もおかし、あど枕詞おくほどにもあらぬ、山添の野邊に二人の農夫たがやしける。一人は南に、一人は北の方にはたらき居たり。まひるの頃おりけり、南原の方を、一疋の鼬なん走り行きけるに、彼の農夫見出しさま、棒とり延べてそを打たんとて追ひ行きたり。北の原の農夫之を見て、いたくおどろきたるさまにて、聲ふりあげ。

北　オ、イ〳〵彼岸だからよせヤイ。彼岸だからよせッちうに。彼岸だから助けてやれッてエバ。

とぞよびかけたり。南原の農夫之をきゝ、鼬を追ひやみ、棒ふりすてつゝ、前の畑に歸り來りたるが、いと考へあたりたる面付にて。

南　長生はするものダ、若い時分から彼岸〳〵チウことア聞て居たが、ついぞ見たことアなかつたに、今日のがあれが彼岸か。彼岸ちうものは鼬にそつくりダナア。

通俗理解

問　靜けき日和よりも風多き日の冷たきは

新鮮なる空氣たへず人躰に觸れ、躰内の熱を取るが故なり、空氣もし人躰に接して久しく動き離るゝことなければ、遂に人躰と其溫度を均しくす、之を以て寒を感ぜず、風なき日は之が爲めに寒むからず。

問　藥鑵の湯を冷さんに何處を冷すべき

湯の表面を先づ冷ますべし、表面の湯さむれば重くなりて降り、他の熱きもの代りて其處に來り又ひやさる。湯の底よりひやさんとすれば効能なし。

問　月夜は樹木の生長によろしきか

月夜は晴れたる夜なり、晴れたる夜には露多く、樹木の育ちよろし。

問　躰を水にひたせば何故冷たき

水、躰にふれて躰熱を取去り、其水蒸發し去る、蒸發のさきはいよ〳〵躰熱を取る、此を以て躰に冷たき感あり。

小說

小公子

第四回（下）　若松しづ子

遂に、旅仕度も悉く整のひ、荷物を蒸氣船へ運ぶ可き日も來り、其中馬車も戸口へ止り升たが、セドリックは此時妙に淋しい心持になり升た。暫らく自分の部屋に閉籠つて居つた母が、下へ降りて參り升た時、母の眼が大きく濡れて居つて、愛らしい口元は震へてゐ升た。セドリックは思はず側に寄り升て、母が屈んだ處へ抱き附いて、共にキスをしました。何故とは分らねど、兩人とも裏悲しひ心持になつてゐたのを、セドリックは先づ承知して、悲らしひおもひを、口へ出してこふ云升た、

かあさん、ふたりとも此家好だつたんですネ？、いつまでも好になつてゐませうネイ？。

母は低い優しい聲で、

セデーやほんにそうだよ。

それから馬車に乗り移た時も、セデーは殊さらに近く母にすり寄り、母がなごり惜そうに馬車窓から振り返つて見てゐ升た時、セデーは母の顏を窺いて、そうして母の手を撫でながら、シツカリ握つてゐ升た、そうこうする中、間もなく、恐ろしひ混雜の中に蒸氣船へ乘り移り升た。客人を乘せた馬車は、頻りに往復して、其客人は荷物の遲くなるのに氣をいらつてゐ升た、大きな櫃や箱を投げ出しては引づり廻る者が有れば、船頭たちは纜を解て、こゝかしこに奔走してゐ升た。貴婦人や紳士、子供や守りは、追々と乘込んで來て、笑つて嬉しそうな貌つきの者が有れば、口を閉ぢて悲しそうな樣子の人もあり、其中に二三人のひとは泣ながらハンケチで眼を拭つてゐました、セドリックには何處を見ても面白くないものはなく、繩の積や、捲いた帆や、殆ど蒼い炎天を突かとおもふ程高い帆柱などを見るにつけ、船頭たちに話かけて海賊といふもののことを聞出そふといふ心算が、モウ心に浮びました。最早出立の極く間際にあつて、セドリックが甲板の手欄に寄り掛りながら、船頭や波止場人足の騷動を面白く思ひ乍ら、最後の準備を見て居る時に、自分に遠からぬ一群の中に、何やら少し込み合ふ樣子のあるに氣がつき升た。誰か其群集の中をくゞり拔けて自分の方へ來ると見れば、手に何か赤い物を持た男兒であつて、よく〳〵眼をすへると、イキセキセドリックの方へ近よるものは、まがひもないヂックでした。

イヤア、駈つ通ふして來たんだよ、おまへに逢ふと思つて。大變な繁昌です、昨日の儲で之を買つたんだ。おまへエライ人のとこへ行つたら持て、歩るくが好い。下で上げねへちうもんだから、おれが騒ぐ內に、包み紙がどつかへ行つちまつたんだ。ソラ、ハンケチだぞ。

とのべつに言つて、セドリックが何とも返事の出來ぬうちに合圖の鐘の鳴るのを聞いて、又一飛に駈て行つてしまいました。行く前に息を切りながら、

さいなら!。エライ人のとこへ行つたら、持つて歩るきねへよ。

といふ聲を殘して影は見へなくなり升たが、間もあく、込み合ふ中をくゞりぬけて、下の甲板へ下り、波止場へ足をかけるかかけぬに、棧橋は船へ引上つて仕まいましたが、波止場に立ち止つて頻りに帽子を振つて居り升た。此方にはセドリックが、今貰つたハンケチを手に持つて、向ふを眺めて居り升たが、見れば、紫色の馬靴と馬の頭が飾に附いた、眞赤な絹のハンケチでした。其中一層ひどひ混雑の中に轆る音や引張る音が慘ましくなつて來まして、波止塲に立つ人は、船の上の人を望んで叫び、船の上の人は送つて呉れた朋友に叫んで暇乞をする其聲が、

さよなら!皆さんさようなら!忘れては嫌ですよ!、リヴアプールへ着たら、手紙をおよこしなさい!さよなら!、さよなら!。

と誰云ふとも知らず、暫らく鳴りも止まずきこえました。フォントルロイ殿は欄干へ寄つて、ずつと前へ身を伸しかゝり、大威勢に、

ヂックや、さよなら、有難うよ、ヂックや、さよあら!。

と呼はつて居ました。スルト大きい蒸氣船は靜かに動き出し人々はまた大聲に呼はり、セドリックの母は覆面をとさらに眼の上へ垂らし、海岸では大した混雑でしたが、ヂックはフオントルロイ殿のパッチリした可愛らしい顏と、きら〳〵光つて、風に吹き流されてゐる頭の髮を、ながめて居つて、他は一向に夢中でした。フオントルロイ殿は精一杯な幼な聲て、

ヂックや、さよなら!。

と呼つて居ましたが、滊船の徐かな進行と共にフオントルロイ殿は故郷を離れて、まだ知らぬ先祖の國へ旅立いたしました。此の船旅の間に、セドリックの母は、自分の住居とセド

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

リックの住居とが、別々になるのだと云ふとを始めて云つてきかせました。セドリックがそれと漸く合點の行きました時、驚き歎くとが非常でしたから、ハ氏も母を切めて近い處に住まはせて、折々對面の出來る樣にした、老侯の取斗らひに感服した位でした。さもなくば、到底母と引別けるとは爲し難い樣に思はれました。併し母の慈愛を籠めた優しいなだめによつて、左程に遠く離れるではなく、誠の離別ではないといふとが分つて、漸く少し慰めを得た樣子でした。

セデーや、わたしの家といふのは、お城から大して遠いのではないよ、少ふし斗りしか離れてゐないから、おまへが毎日馳けて來て逢る位なのだよ、それからおまへが色々かあさんに話すとが出來るだろうし、いくら嬉しいか知れないよ、チイ?、お城といふのは、大層美しい處だつて、とうさまがよくお話しをなすつたつけよ。とうさんは、大層そこがお好だつたが、おまへもキット好になるよ。

と其話が出る度に、かう申てはなだめました。セドリックは、大歎息で、此話を聞き、

ツウ、それでも、かあさんも一處なら倘ほ好になるは。

と云ました。子供心に、母と自分とを別々の家に引別けるといふ不思儀な取斗らひが、どふいふ譯かと思ひ惑はずに居られませんかつた。實は何故かういふ都合になつたかのと譯は、セドリックに知らせぬが却つて好かろうと母が思つたので、ハ氏に對つて此の通りに云ひました、

わたくしはどうも云つて聞かせぬ方が好かと思ひ升よ、聞かせました處ろで、よく分かりもし升まいし、却つて驚ろいて心持をわるくする斗りで御座いませうから。それから又、お祖父樣がわたくしをそれ迄にお嫌ひ遊ばすといふことを承知いたさぬ方が、そつくり其のまゝお懐つき申さうかと存じます。セデーはこれまで、凡そ憎しみとか不人情とかいふとを、一切見聞いたしたことが御座りませんから、だれかわたくしを憎くむ者があるなどゝ申したら、それこそ大した驚ろきで御座りませう。あの通り優さしい子でござい升のに、わたくしを思ふて呉れ升のが亦一通りならず深いので御座りますから。どふしても、ズット年をとり升までは、申して聞かせぬ方が、自分の爲めのみか、侯爵さまのお爲めにも、宜しかろうと存じられます。若しさもなくば、セデーがあの通りな子でも、矢張りお祖父樣との間に隔てが出來ようかと存じます。

曙女史、木村榮子の傳(上)

清花女史

去十九日悲しくも失せたる曙女史が傳を、同窓の友にして而も文學及び事業の上何くれとなく無二の親みありける、高塚きよ子(清花女史)が物され、寄せ玉ひたるにより、左に掲ぐ。

有爲轉變の世の中、生者必滅會者定離、……とは思へども、悲しきは、親しき人に死別れ、いませし時の、言の葉など、かきあつめ袖ぬらす、時に增る事やある。此頃親しき友、木村榮子(曙女史)の君の、結核性腹膜炎てふ、病にて、身まかりたまひしにぞ、是非君の傳記かけよとの事、きくもなみだに、くもりがち、かみしむ筆の後や先、拙き文をもかへりみず、はぢかゝやかして、書つけぬ。

君は兵庫縣人、木村莊平氏の、長女なり、攝津の國、神戸に生る、幼より、才智人にすぐれ、萬事に、かしこく、人皆奇女とたゝへたり、四五歲の頃より、常人に異なり、或る時は、山に遊び、又海邊に日を暮して、男子の中に、交はり給ひしゆゑにや、性質おのづから、雄々しく、なりゆき、身躰も、いと健かに、生長て、諺にいふ、獨子の、病勝のたぐひにあらず。東京に居を移されてより、十四歲の頃まで、三田南海小學校に、入學され、定めの、科目を、をはりて後、東京高等女學校へ、入校したまひぬ。實に天のなせる、才色機敏、日に月に加はり、花の如き顏、柳のごとき姿、かてゝ英佛兩語に通じ、並に音樂手藝、一として、そなはらざるなく、態度活潑にして、言語爽かに、試驗の度歷々優等の成績を、顯はしたまひぬ。

明治十八年頃、婦人洋裝流行の時、何處の宴會、何邸の園遊會など、集ひ給へる貴夫人令孃等すべて、洋裝あらざるなく、衣服はさらなり、腕環襟飾のたぐひに、至るまで、皆外國の品を用ひ、舶來の品にあらざれば、美しとせずして、人の目にふれざる有樣、あはれ此のまゝにて進みゆかば、如何ある結果をやきたさんと、思ふ折り、君は他の生徒に先立ちて、逸早く洋服を着け給ひたれど、さとくも此に心を留め、同志の友と、謀りて、二タ子、海氣、及び種々の織物、すべて日本品のみを、擇みて、衣服を造り、一切の裝飾まで、皆本國のものを用ひ、給ひしかば、當時學校の外國語女敎師プリンス氏之を見て深く其の美擧をほめ、一般の生徒も都て此れに倣はせたり。其れより君は我が國の織物ぬひとりなど、女子一般の手藝品に、一層の改良を加へ、輸出品を盛かんになさば、一はあるに甲斐なき女子の身にて、國益を謀かり、日本

美術國の名にも叶ひ、二には爲す事もなく、永き日を、遊びくらす、女子達の、手內職ども、なりなんと、其の師丸橋光子氏に謀り、思ひたち給まひし、折もおり、卒業の期も終りたれば、いさみよろこび、先づ實地修業のため、外國へ、留學の事を……（つゞく）。

批　評

(98)。日本女子讀本初步（大本二册、上册廿九葉　福岡市博多磊落堂版）

打明けて言わば、初めは亦た例の輕薄者が著作かと思ひて讀み行きたり。一二葉讀むうちに、感を起し、更に進みて驚ろくと一と方ならず、卷を終るに及びて、思はず案を擊ち作者が注意の面白きに服しぬ。容儀よりお白粉の事を說き、お白粉より金屬の有害なるものを說き、轉じて衣服の事を說き、更に轉じて玉と海綿との事を說くなんど、讀本と云ふもの丶組立方を何如にも能く承知せらるゝが如し。但し文章に至つては何ほ錬えの足らざる所ろあり、例せば、

お孃さんは、最早裁縫を學び給へるか、

然り。學校にてこれを學べども、他の學科もさまぐ\あり。

の如き、如何にも調子わろし。下卷は未だ見ず。然し乍ら著者が學の深からざると文に達せざるとを明らかに示すと同時に、其組立方の注意に一種の靈眼あるとを十分に證表し、趣味中々に淺からず。

(99)。日本女子讀本（大本四册一卷三十七葉　福岡市博多磊落堂版）

前と同じく、吉田利行氏が著なり。之には左して目立たる所ろあらず。彼の「男女同權論の盛んに行はるゝ歐羅巴洲に於てすら獨逸國のブユフチル女史は」と云ふとの如き、引例至つて宜しからず、何故に米の合衆國を引かざる、よし歐洲の事を言ふとも何故英國を引かざる、獨逸國は固より女權論の至つて低き所ろなるものを。

(100)。女子文例（中本一册百二十四頁定價三十錢　福岡市博多磊落堂版）

筑前香川恕經氏の著なり。下に文例を出し、上に文字の註を載す。和文めきたれど氣骨あり、たとへば白石の文に倣ふものの歟。春夏秋冬にわけて、終りに、雜、祝文、の二部を加ふ、設題今樣めきて、必らずしも古からず、數多ある女子文例の著作中、大ひに卷后に立たんほどのものにはあらじ。

○新編物理學　木村駿吉氏著、全一卷。

物理學現今之進步を著はしたる著者は、新らしき思想を以て物理學の敎科書を編するに適す、此著あると頗ぶる賀すべし。前に概畧年表を加へ、后に雜問を附し、特更に英式の度量衡

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を用ひたるなど、用意深切なり、「文章は俗文脈を採る、是れ編者が平素の意見なり」とあれども、例へば、エネルギー變衰の條りに（三二〇頁）、

今一量のエネルギーを投して二の物體を摩擦するの仕事を爲せば、紐を以て机を摩擦するが如く必ず熱を生じ其量は費されたるエネルギーの量と等しかるべし、然れども二の物體が熱せられたりと云ふは、其周圍にある空氣の分子よりも此等の熱體の分子が速に烈しく振動すると云ふことにして此等の分子は振動するにより周圍にありて緩かに振動する空氣の分子及びエーテルの分子及び其他の物體の分子に衝突して……

とある如き、文章俗文脈と云はんよりも寧ろ直譯脈にして、洋語を解せざるものには分り惡くし。此耳を一大欠點とす。

○嫁入仕度に敎師三昧　撫象子

美妙齋主人が作にて、束髮を當手にしたる、あると無き事の言文一致小説は、之にて絶筆とする爲の惡口なるよし。若し之を一種の女性演説家を罵倒し、其醜情を暴露して以て女風を改めんとするの精神に出づとも見ば、辛ふじて一讀するとを得べし。然れども尚ほ「廢れ玉子」に劣る万々。凡そ人の臟腑を解剖的にさらけ出すとは、高尚なる文士の天職にあらず、罪を滅ぼさんとて罪を暴ばくは固より宜し、然れども必らずや或る限度以上を超ゆとある可らず。同じく惡風を筆誅するにも、今少し書き樣のあらんものぞ。讀ゆきて、ひやく\とする所ろ多し。

○新著百種、つゆ小袖　撫象子

渡邊乙羽君の著あり。元祿文に倣はんとや、苦辛のあとありく\と見ゆ、文は些さか似たれど、何分にも余情少なし。一篇の大主旨何處にある。酒と山仕事とをそしり家族父子の樂しみを寫さんとするかと思へば、紫屋親兵衛が繁榮は元と投機よりの僥倖なり、其妻も、五平と共に死して、ホームの樂しみ久しからず、二人の娘親しみ深しと云へど、大跡の趣むきに何の關わりあるやを知らず。實事談かと云へば固より然らず。小説かと云へば重なる主旨の在る所ろを知らず。人情を寫すが爲めかと云はゞ、一人もキヤラクターの定まりしものあるを見ず、親兵衛と五平と、お槇とお蝶と、お玉とお花と、何等特殊の性質ありや。そもく\、露小袖の稱號何處より來る。われ共に皆な之を辨知すると能はず。

○幕府時代小説叢書　第一號

アモ作者の膽をひしぎ、多數の讀者に滿足を與へ、後の小説家の材料に供し、古人の辛苦の跡を保存せんとて、幕府時代の小説を編輯し、追々分版の都合なる由。此號には、上田秋成の雨月物語、西鶴が本朝櫻陰比事、馬琴が俊寛島物語、一九が膝栗毛、種彦が諸國物語、近松が蟬丸を載す。同じくんば、ちと珍らしきものを見たしと望む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一家評

雲峯子

○しがらみ草紙第十一號

世亂れて後英傑あらはる、我國の文學世界漸く繁雜の時代となりぬ、當に文壇の勇士頭角を地平線上に擡ぐべきの時とす、而して吾人は之を思ふ毎に柵草紙を忘るゝ事なし、何となれば是必らず我國文學界の勇者集る所にして將來の文運に重きを致すべきは吾人が斷信する處なればなり、今や十一號に接す、一號毎に多少進歩するが如く見ゆるぞ誠に嬉しき、本號には格別雄篇といふべきものなけれど全體に面白きが如し、文海の藻屑は正たしかに世想を脫せる卓見あるを認む、吾人亦蒲叟氏の說に左袒して多少の意見あり、されど是は他日に讓る、本號中殊にうれしく閱讀せしは歌人の傳なり、未だ人に知られざりしものを許多た世に紹介し玉へるを謝す、うたかたの記を評せる文三篇は卓拔の文字と思はず、多くは人の知る所を云ひしに過ぎず。

○日本の歌學全書

吾人は再たび萬葉、古今の時代を來さんと溶ふものに非ず、貫之、人丸、赤人を明治の文擅に再生せしめんと欲するものに非ず、只我國古文學の廢滅に歸せんとするを嘆ずるのみ、蓋し我國の文學は幾多の長所ありて容易に捨つべからざるものなればなり、されば今日古書遺籍を公にして今後の文學に裨益せんとするは實に祝すべき事とす、先きに日本文學全書なるもの出で吾人は古人の傑作を見るの便を得たり。今亦日本文學全書の發兌を見る、其載する所多くは大家の作のみ、思ふに此書が今後の文學に影響する所甚だ多からん、十五世紀頃西洋に活版術の發明ありて古文學の再生を致し、後世文學の盛運を促せり、我國今や活版の術行はれて印刷の事、便利を極む、之を活用して古文學の將に滅絕せんとするを救ふは大ひに望ましき事ならずや、而して今愈此望を達するを得、吾人は校訂者に對し、編輯者に對し、如何なる言辭を以て謝すべきかを知らず、願くは續々古文學の眞光を世に公にせん事を。

○うたかたの記

清艷子

森鷗外漁史の作に係はるうたかたの記一篇柵草紙第十一號に顯はるゝや端なくも我文壇に於ける紙上筆戰の好材料となれり爾來うたかたの記に對する世評毀譽褒貶一ならず不知庵主人露伴子に贈るの書となり忍月居士の批評となり而して本月發兌の柵草紙に於て賽姿須蜜、松東、淨水寫の批評となり其れ已に世上文學者の注目する所となる好し其批評は毀譽褒貶一ならざるにもせよ兎に角其傑作たるを疑を容れざるなり。

而して余は以上の批評家に向かって不平ある能はず何んとなれば彼等は皆此小說の主眼を以て「三種の狂を寫し出す」ものなりとして絕而一篇時俗を警醒するの大文字たるとを以てせず夫れ小說の要は其の文章に有らずして其作意の主眼に有り如何に其文章流麗なるも苟も其作者の理想の低き時は是れ又一山百文の價値だになかる可し本編已に作意の高尙なる有り加ふるに其文章流麗淡々殆んど淸月に遍るの趣有り嗚呼是近來出色の文字なり。

本編讀み終りて一種高尙なる思想胸間に充ち渡り殆んど其作意を知らず一讀此れ只巨勢とマリーの愛情を寫し終に愛情を永久に遂得させざらしめんとして玆に一の狂生を作り此世ならうたかたの世とならしめ傍ら其の狂の區別と少しく當世美術家に對する諷誡には非らざるやと思はしむ再讀するに及んで其重なる點は忍月居士の所謂三狂卽狂眞狂學問狂を寫し出だし傍ら情愛と諷誡とを以てせしには非らざるやと疑はしむ而れど三讀四讀するに及んで字々皆美術家を諷誡し此に點するに情愛と三種の狂を以てせしものなるを發見するに至る。

殊にマリーが左の言の如きは字々藝家を諷し句々美術家を誡しむるの言なり、

「雛子よ〱、汝等誰れか美術のまゝ子ならざる。フロレンス派學にはミケランジエロ、ドルシイが幽靈、和蘭派學にはリユウベンス、フアン、ダイクが幽靈、我國のアルブレヒトドユウレル學ひたりとも、アルブレヒト、ドユウレルが幽靈ならぬは稀ならむ。會堂に掛けし「スツチイ」二つ三つ直段好く賣れたる曉には我等は七星われらは十傑、われらは十二「アポステル」と壇に見えてそのわれぼめのかゝるえり屑にミチルカの唇いかで觸れむや。我冷たき接吻にて、滿足せよ。」

六頁下段

「若し然らば世に博士と呼ばるゝ人は。抑いかなる狂人ならむ。我を狂人と罵る美術家等、おのれらが狂人ならぬを憂へこそす可きなれ。英雄豪傑、名匠大家と成るには。多少の狂氣なくてかなはぬとは、ゼ子カが論をも、シエキスピヤが言葉を待たず。見玉へ、我學問の博きを。狂人にして見まほしき人の、狂人な

らぬを見る、其悲しさ狂人さならでもなる國王は、狂人さなりしさ聞く、それも悲し　十頁下段十一頁上段

讀者乞其表を見ず其裏を見よ本編は實に是れ當時の美術家を諷誡したるの大文字なるぞ而して其諷誡するやマリーの如き一種奇狂なる少女兒を以てするに至りては覺へず案を拍ちて三嘆せずんば非らず夫れマリーの人物たる大山巖さして動かさるが如く威風凜々意氣高尙容易く人に犯し難からしむ巨勢が來歷を「聞き終りし時は胸騷ぎ肉顫へてわれにも有らで少女が前に跪かむさしぬ」るも理なきに有らず「母に引かるゝ稚子の如く從ひ行き」しも無理ならず思ふに本編の主眼たる奇狂の女兒マリーの言を藉りて作者の美術家に對する要求さ希望さを陳べしに非らざるか。

他字句の妙及巨勢さマリーの情愛の成立の順序さ三種の狂さを區別してたくみに寫し出したるに已に忍月、松東兩氏の批評に出でたれば暫く言はず只余は此編に最も多く反照の妙を盡くしたるを上げ殊に上中下編皆な結末以て字々皆金玉さなすものなり見よ

幾頭の獅子の挽ける車の上に勢よく突立ちたる女神バワリヤの像は先王ルウドヰヒ第一世が此凱旋門に据させしなりさ言ふ　一頁起首

此の時の少女の姿はすみれうりにも似ず、ロオレライにも似ずさながら凱旋門上の「バワリヤ」なりさ思はれぬ　六頁下段

其面を打ち仰ぐに女神バワリヤに似たりさ思ひし威嚴少もくづれず　六頁下段

巨勢は如來の如き少女が肩に我頭持たせ只夢のこゝちして其の姿を見たりしが彼凱旋門上の女神バワリヤ又胸に浮ひぬ　十三頁上段

「エヌス」「レダ」「マドンナ」「ヘレナ」何れの圖に向いても不思儀やすみれ賣りのかほばせ霧の如くわれさ畫額の間に立ちて障礙をなしぬ　五頁上段

少女「さては畫額ならぬ我姿さ君の御間にも其花うりの子立てりさ覺へたり我等離れさか思ひ賜ふ」さて「われは其すみれ花賣りなりさ」隔日前マリーの顯はるゝを覺ゆ

「遺恨に思ふ可き事がは月影をすかして見よ頷に血の迹はさゞめじ吹きかけしは水なれば　上編結末

「悲しき事のみ多ければ晝は蟬さ共に泣き夜は蛙さ共になけごあはれさ言ふ人もなしおん身のみは情けなくあざみ笑ひ玉はじさ思へば心の行くまゝに語るを告め玉ふな嗚呼かういふも狂氣か」中編結末

國王の横死の噂に掩はれてレオニに近き漁師ハンスルが娘一人おなじ時に溺れしさ言ふを問ふ人もなく止みぬ　下編結末

讀み終りて一唱三嘆餘音嫋々さして長し殊に上編咖啡店を寫すの段

客なき卓に咖啡碗置いたるを見れば皆倒に伏せて絲敷の上に砂糖幾塊か盛れる小皿載せたるもの也　二頁上段

さ折りしも漕ぎ來る舟に驚きてか蘆間を離れて岸の彼方へ高く飛び行く螢有り。あはれこれは少女が魂のぬけ出でたるには非らずや」に至りては讀み終りて其精密滴水泄さざるの筆力に感佩せずんば有らず。

夫れ苟も文學家たらんさ欲するものは社會の批評家たるを以て亦た一ツの責任さなさざる可からず已に社會の批評を以て責任さなす須らく其眼光を白雲以上に置かざる可からず。

社會の事情は寫すのみならず社會の迷夢を警醒せざる可からず則ち社會の奴隷さならずさ社會を奴隷さ成さざる可からず余是種の文學者の出てんとを望み是種の小說の出てんとを望むと茲に久し今鷗外漁夫の此の作に逢ふ溪谷響音を聞くの思有り嗚呼誰れか是れを以てマリーさ巨勢さの愛情を說くものさなすか誰か三人の狂を寫すのみに止まるものさなすか況んや是を以て一口劍を下ると數十等さなす不知庵主人は如何に此書を讀みしや將た「不知庵此間に於て數十等を分つ吾其等の少なきを笑はざるを能はざるなり」さ云ひし澤水爲其人は如何に此小說を讀みしや。

○評論監獄世界　新誌子

佐野尙氏の編輯發行に係る、監獄世界出來事に一々評を加へ、毎月二回づゝ出版するものさす、編輯もらす所ろ少なし。

○貧民　同

神戶貧民救濟義會は甞に、貧民救助の爲め著しき働を爲しぬ。吉本襄氏は「日本人」に於て高嶋炭坑の虐待を絕叫したり。今は彼會より此人を編輯人さして、「貧民」第一號を發兌す時勢の必要に應じたる慷慨憂民の論多し。

○耕余學會雜誌　同

神奈川縣高坐郡に耕余義塾さ云へる私塾あり、其處より題名の雜誌を發兌す。此塾開けてより「西より東より來り學ぶ者數百千人」さ記せり。世に聞えぬを以て吾人も久しく心着かざりき。今ま雜誌の文を讀むに、英文は出來よろしからず、日本文は漢味多し、塾の當路者には慶應義塾派の人多きに似たり。凡そ地方に僻在して一風の學校を維持し而も其長所を著く世に發揮せんさには、西京の同志社の如く、熊本の紫溟會の學校の如く特殊奇異の點なくんばある可らず。吾人は此外の更に多く精神的ならんとを希望す、否な塾の事は知るに由なし、塾風の顯照して此雜誌帋面に出現するものゝ更に一層熱心炎々たらんとを希望す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

○能辯學會をして輕辯學會たらしむる勿れ

可愛子

十月廿八日午後、間を偸んで、能辯學會の演說會に赴く、時間後れたれば、多くの辯士が十分に辯を振はるゝを拜聽する能はず、唯信夫、宇川、鈴木、城山、語地五氏の演說を聽きたるのみなりき、諸氏の辯舌、實に能く廻れり、其言ふ所も亦金玉といふを得るものなるべしと雖も、余輩は其語氣輕薄、講義風に流るゝなき乎、落語家風に傾くなき乎と疑ふなり、余輩は近來學術研究、智識交換の目的を以て立てたる集會が、其目的を果さず、若くは幾分か其目的に近づくあるも、其集會の内に吹きつゝある遊惰の風、輕薄の俗に、會員を感化し去り、結局其會なかりし方、却て大によかりしならんと思ふが如きとあるを惜み、且悲しみたり、今ま能辯學會の演說會に臨みても、幾分か之に似よりたる感覺を起したり、妄りに過激の言をなす、妄りに滑稽を弄す、固より聽衆の喝采を博すべし、然れども之と同時に、演說家自身の品格を失墜するとを知らざるべからず、我會員よ、我辯士よ、我聽衆よ、願くは此愛する能辯學會をして、輕辯學會たらしむる勿れ、余輩は衷情よりして之を希望す、勸告す、

文論

●一女子　御問ひの事は醫師に御尋ねを願ひます、格別藥と云ふても存じませんが、よき療治法のある事は嘗て聞て居ります、昔は此術を知らなかつた故一生涯カタワの如くにて送りし者もあつたと云ひますが今日の醫師は療治して直すとの事です故に御友人の臆病なるは勵まして屹度醫師の診察を乞ふ樣にするが大切でしよふ、

●稻花生　箇人的教育と國家的教育の事につきて縷々御問ひですが此處では餘り長くなります故答へられません、

兒童に神を知らすは如何なる方法が宜しひか知りません、而し私の考へにては聖書中にクリストが實例を示し云ひしが如く譬をもて敎ふるより外によき方法は御座いますまい其譬をもて語るのは餘程熟練を要する事と思ひます、其他感心すべき話しをして聞かせ、間接に敎ふるも宜いでしやふ、

●東京中の女學校　筑前山内氏、府下に幾多の女學校があるやとの御問ひ、近頃の調査を見ませんからよく存じません、昨年の調査によれば百餘りあります、而し是は勿論女學校といふ名目のついたものを悉く數へたので中には生徒の數五人とか十人とか云ふ位の多くありました、今日でも矢張數は多いでしやふ、

●野田氏　過日の紙上に揭けし速記器學院の事色々御問ひですが之は同院の規則書を御覽になるが宜しひでしよふ、府下芝區三田一丁目卅三番地日本速記器學院として御申しこしになれば分ります、

時事

○監督の女囚

靜岡縣に於て男囚と女囚との情死あり。廣島縣に於て、垣を越て猥褻の事を遂げたる者あり。此に於て、女囚取締の事近來やゝ當路者の注意を促がし、高知縣の如きは女監と男監との隔離を遠くしたり。此上、女囚には女監獄を置くに至り、其取締方いよ／＼懇切に且つ周密ならんとを希望す。

○伯爵夫人

江湖新聞の云く、松方伯爵政子夫人は溫柔にして毫も顯貴に誇らず召し使ひの下婢、馬丁に至るまで一家内の如く遇はるゝより何れも其淑德に服せざるはなし是もツイ此程のことなりとか夫人は當地より相州富岡の別莊に赴く途中橫濱より稅關の小蒸氣船に乘られしに當日は少しく空模樣悪しく海上穩やかならざりしを以て舟子等は非常の心配をなし若し夫人の身に障る所ありては一大事と必死となりて漸く富岡へ着せしが夫人には太く舟子等の盡力を謝し別莊の下婢に命じて晝飯を饗せんとせしに折悪く其備へなかりしかば夫人は自ら襷を掛けて飯を炊き舟子を厚く饗したれば舟子等は只管夫人の慈心に感じ覺へず袖を濕したりと云ふ。

○知事、品行取締となる

京都府知事は巧みに微行細窮して、下役の品行遊事を精わしく取調べ、遊びが過ぎて月給にて引足らずと考へらるゝ程の時に至れば、先づ之に忠告し、次に勸告し、尙ほ聽かずんば遂に免職すと云へり。今の知事たらんものゝ苦辛亦た極まりなき哉。

○女子傍聽禁止

報知新聞も、東京新報も、國民新聞も、大同新報も、自由新聞も、都新聞も、改進新聞も、經濟雜誌も、皆一齊に、女子傍聽禁止の規則案に反對なり。議員集會所の政務調查に於ても、貴族院の調査員に於ても亦之を取除くとに議決せり。輿論既に定まる。

○遺す所ろなし

日本及び經濟雜誌などにて、何故へ改進黨にのみ書を寄せたりやと詰れり、左れど有志夫人は、立憲自由黨にも、又た大成會にも同じく投書したりと云へり。

○ユニテリアンと佛敎

二つ同盟すべしなどの流言ありしが、ナツプ氏が六合雜誌に寄せたる辨護文に云く。ユニテリアン敎と佛敎の同盟と云ふがごとき愚妄は嘗て夢みしとあるなしと。

○經濟と道德

經濟雜誌記者近ごろ云く、經濟學を學問として講究するとと、經濟學の原理を社會の事實に應用するとゝは全く別事なり、經濟學の原理を社會の事實に應用するに至らば固より道德上……の標準に照らして之が利害得失を考究せざる可らず、

我國に於ても世の經濟論者往々此の緊要なる一大事を忘るゝ。珍らしき議論にはあらねど、經濟雜誌の所論としては、甚だ目立つやうに見ゆ。

○家政ラボラトリー

米國ノースフヒールドに在るムーデー氏の女學校には、此度びドメスチック、ラボラトリー(家政試驗所)を創設し、ハンチンゲトン女史教授の下に、一百の女學生日々家政上の實地試驗を學ぶ。ラボラトリーの名極めて面白し。

○移住民と宗教

ハワイのホノルヽにて發兌するゼ、フレンドに云く、當地にて按手禮を受け宣敎師に爲りたるもの始めて二人あり、一はギルバルト島の人にてモゼス、カワレと云ふ、又の一人は岡部(元の松澤)二郎氏なり、而して岡部氏はハマクア近邊二千の日本人を監督し之が教師となる、頗ぶる敏且つ熱心の人なりと。我同胞の新移住地に、宗敎の傳播するは最上の喜びなり。宗敎なき移住民の成功するは古來極めて少なし。岡部氏受禮の日、よめる歌に、

斯君の敎をうけて今ぞ知る過ぎこし方のつみのふかきを
憂き坂も死陰の谷も後に見て天津シオンに急ぐうれしさ
飛鳥川變り行く世にながらへて變らぬ道を開ぞうれしき

○廣告文の取締

政府やうやく氣着きぬ。廣告文の取締は嚴重ならずんばある可らず。英米すら今日にすでに遲すぎて困り居る也。

○春畝翁出園

內閣以外に伊藤伯あり、樞密院以外に憲法伯あり、博文氏の國產想ひやらる。左れど既に立てり、ごこ〳〵迄も勇を鼓して十分に試みられんとを望む。

○護國銀行及宗敎銀行

別々にあるとの可否は固より知らず、况んや互ひに相爭ふに至ては尙更ら感服しがたし。然れども其目論見に至ては實に佳なり。僧侶前途の爲めにかゝる企あらんと頗ぶる願わし。但だし經濟上の事は如何にも精密になさずんばある可らず、兎角集めたるものが行方を失ふやうの事に至らずるを勿れ。

○鷄鳴茅屋の圖

國民新聞停止中にて、近頃ろ新聞帋上に見るべき圖畵なし。去二十四日自由新聞に米僊氏が寄祝したる、鷄鳴茅屋の圖は近來見ざる所ろのもの也。意匠妙、筆活躍せり。

○櫻痴居士

能辨學會に於て講釋したり。演說と云ふと勿れ、須らく講釋せりと言ふべし。語口才を以て、薄き舌を以て動けり。心火にて燃やさゞるものは、人を心服せしむると能はず。政脉と學問と併行すべしとの說、惜しひ哉すでに遲し。語勢連惑を起すとうすく、餘韻を奏すると貧しかりきが故に、聽衆意外に失望したり。

片々　　ふみ子編

●皇太后宮の坤德　申すも畏けれども皇太后宮陛下は日頃稼穡の艱難をも知し召され農民の粒々辛苦に御心をおかさせ玉ふこと大方ならずと承はりしが此程も大日本農會へ皇太后宮屬林有隣氏に仰付けられて同會の報告を御覽遊ばされたるよし

●一條松蔭院の御東上　皇后宮陛下の御母公一條松蔭院と申すは御齡ひも七十路に坐せられ今尙ほ御健やかとは申せども早や御老幹の御身にしあれば陛下にも御氣遣はしく思し入られ御東上の儀を申し勸めさせ給ひし程に院にも御納得ありて愈々去廿六日京都御發足にて東上の途に就き玉ひしよし

●敎授の陞叙任命　女子高等師範學校敎授正七位中川謙二郎氏は奏任官三等に仝從七位野口保興氏は奏任官四等に陞叙せられ仝坪井玄道氏は仝校舍監兼任を命ぜられたり

●日本に始ての祝式　宮城縣桃生郡中津山の人千葉泰藏氏は結婚の後五十年を經而かも初婚のまゝ子孫三夫婦打揃ひ和氣堂に溢るゝをもて此度金婚節を施行せんとし友人松田常吉氏より江湖の祝詠を募ふの廣告を去る廿五日の東北每日新聞に掲載したり、我邦にて金婚節を祝するは此人を以て始めとす金婚節とは西洋の風にて結婚より第五十周年のことをいふ　(報知新聞)

●唱歌科の及第者　唱歌科敎員試驗合格者は小澤淸、鐘ヶ江リキ、小川儀太郎、羽根田アサ、渡邊鍜次郎、中澤トモの諸氏なりと

●京都に於ける男女混合芝居　京都祇園館にては一昨二十六日より男女混合の芝居を開場したりと

●聾且啞　ルヰス、ゴーシャー孃は生れながらにして聾且啞なる不幸者なるがクロッセリンの敎授法と云へるものにて導きしかばよく學び得て讀み書きの事悉く卒業し美術學校の敎師たらんとて試驗を終へたり、其成績により滯なく敎師の職に當たれりと

●福岡婦人協會　仝會は五六年以前に設立されたるものなるが其後一時衰頽の摸樣を呈し居しに仝地出身の野村トメ子といふ人今度高等師範學校卒業の上歸縣したるを以て男女の有志家と計り再び仝會の擴張を圖らんとて目下奔走中のよし仝地よりの通知

●橫濱に於る廢娼委員　仝委員の人には神奈川縣會開會中に盛んなる廢娼大演說會を開かんとて目下頻りに協議をなし居るよし

週報

官令　二十四日東京學士會院規定を公布さる●海軍の服牀等に關する諸規定を裁可公布せらる

政治　二十四日伊藤博文氏貴族院議長に任命せらる●二十七日貴族院諸士華族會館に會す●二十八日立憲自由黨員京橋區伊勢勘樓に茶話會を開く●大成會政務調査委員を撰定す

叢報　廿二日より全國菓子商大會を京都に開く●廿八日能辨學會大會を厚生館に開く●廿三日森代議士の豫審終結●長途の滊車切符通用の日限改正せらる

教育　二十五日帝國大學にて五科大學生の陸上競技運動會を開く●仝日神奈川縣教育會開會●帝國大學醫科生七名卒業

宮廷　廿六日天皇皇后兩陛下茨木縣へ行幸●二十五日皇太子殿下帝國大學運動會へ行啓あり

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良なり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

廣告

本會ハ都下無數ノ普通學校中獨リ英語英文學專門ノ旗幟ヲ樹ツル者也○本會ハ帝國大學撰科高等中學校農科大學高等商業學校海軍兵學校工業學校其他諸官立學校入學試驗ニ應スベキ英語ノ學力ヲ養成ス○本會ニ用ユル教科書ハシエークスピーヤ、ヂッケンス、ロングフエロー、アヂソン、テニソン、ミルトン等ノ如キ未タ我邦民間ニ用井ザル高尚有益ノ詩文ノミ也○來十一月ヨリ譯讀科本科共更ニ授業時間ヲ增加シ一層生徒ノ學力養成ニ利便ナラシム○本年募集文科大學撰科及第者ノ内三分一ハ實ニ本會々員之ヲ占メタリ他ハ推知スベキ也何時ニテモ入會ヲ許ス

英學專門 神田錦町 **國民英學會**

成立學舍女子部生徒募集

今般學期試驗結了ニ付**高等科、本科、幼年科、別科**ノ各級ニ入學ヲ許ス志願ノ者ハ至急申込ムベシ

東京駿河台袋町九番地 私立 **成立學舍女子部**

學事新誌第六號目次

十月廿四日發刊定價四錢

●教育論

第一高等中學校ノ學生ノ設ケタル德義會ニ於テノ演説　西村茂樹君

習慣の勢力

學資金

●學校規則

官立編專門學校ノ部

東京商船學校規則

帝國大學一覽

東京工業學校附屬職工徒弟學校規則　（大尾）

私立編普通學校ノ部

東京福音會規則一覽

共立學校規則　（大尾）

●學校入學試驗問題

士官候補生入學試驗問題

東京商業學校豫科后期入學試驗問題

明治法律學校普通科入學試驗問題　（前承）

●雜報　數件

發行所　東京京橋區疊町十二番地　學友社

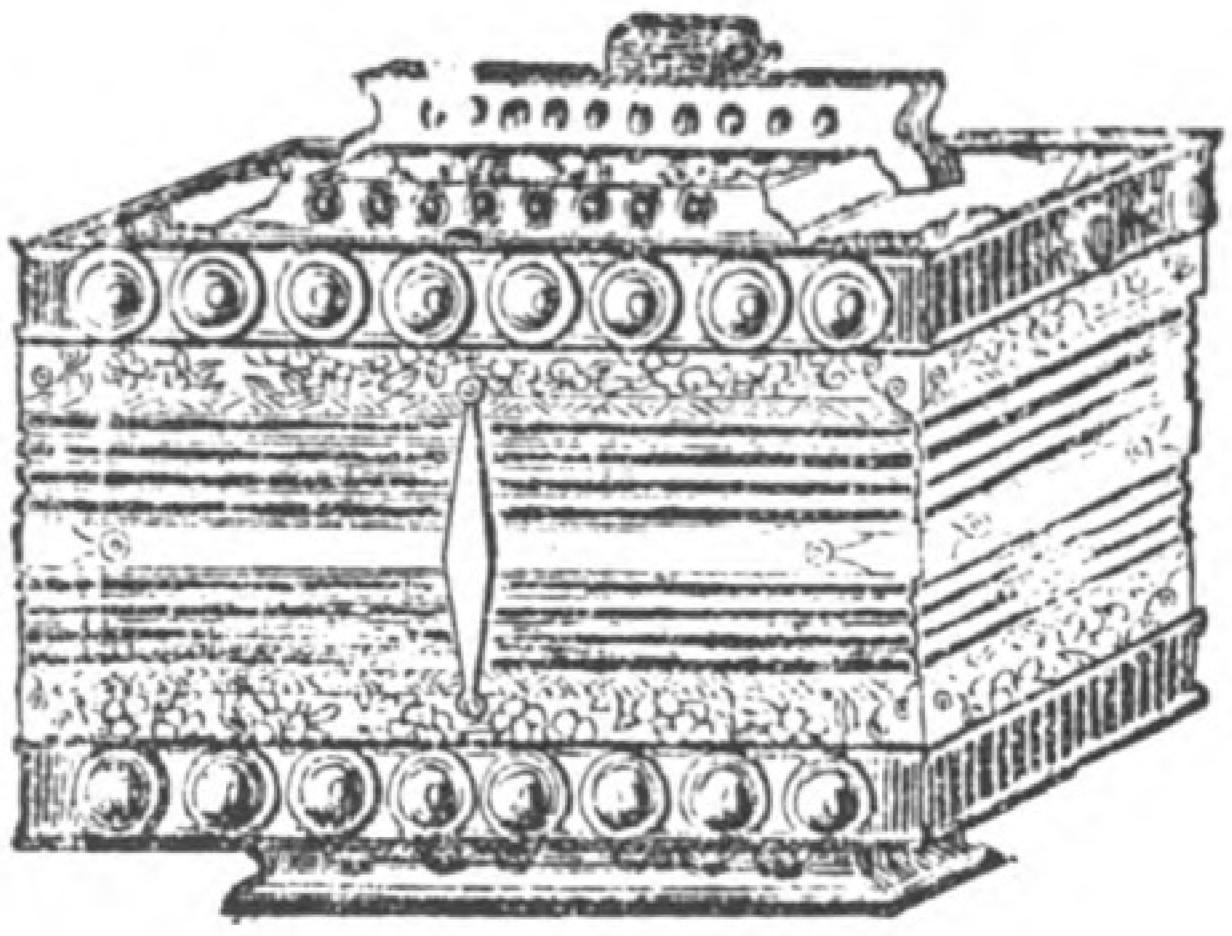
發賣所　東京市神田區雉子町三十二番地　團々社書店

遞信省認可

四竈訥治君著

手風琴獨習の友

第一集定價金二十錢郵税を要せす



花晨月夕手を携へて親む友は手風琴あり一家の團欒朋友の集會商廛の休日膝を交へて樂む友は手風琴あり手琴は簡便にして奏法も亦容易あり本書は最初に詳細なる奏法の説明を掲げ一瞥一讀未だ音樂の何物たるを知らざる兒童の諸君と雖ども容易に解し得て忽ちに彈奏する事を得べし曲の種類は唱歌明清樂曲軍歌端唄流行節等に至るまで網羅して何れの席何れの會に玩ぶも少しも賤しき事なく又恥る事なし四時の行樂場裏に携へて言ふ可らざる好趣味あり請ふ音樂を愛せらるゝ諸彥は速く來りて一本を味ひ此言の誣ならざるを知られんことを

唱歌萃錦

奥好義先生選

奥好義先生選

第二集 定價金十錢

第一 定價 金十錢 郵税 金二錢

右は男爵高崎正風、物集高見、下田歌子、税所敦子、中村秋香、大和田建樹、平田[illegible]、加部巖夫、鳥居忱、服部元彥、東宮鉄眞呂、石橋思案、[illegible]久之助、鳥山啓作、黒川眞頼、鈴木重嶺、湯本武比古、本居[illegible]等の有名家の作歌と「もざーとわぐなー」等の大音樂家及び本邦音樂家奥、上、芝、納所等諸先生の作曲とを以て組成[illegible]たる詞譜雙絶の好唱歌集なり

●音樂教科書 全一冊

白井規矩郎著

實價四十五錢 郵便税四錢

●小學唱歌教授法 訂正再版 全一冊

上眞行校閲 東儀季治譯

定價金二十五錢 郵税金四錢

東京日本橋區通塩町八番地 中央堂書店

同 京橋區竹川町十三番地 共益商社書店

定	價
一冊。六錢	郵税。五厘（但府内無郵税）
十冊。五拾八錢	郵税。五錢（同前）
半年分 壹圓四拾三錢	府外は 壹圓五拾六錢
一年分 貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

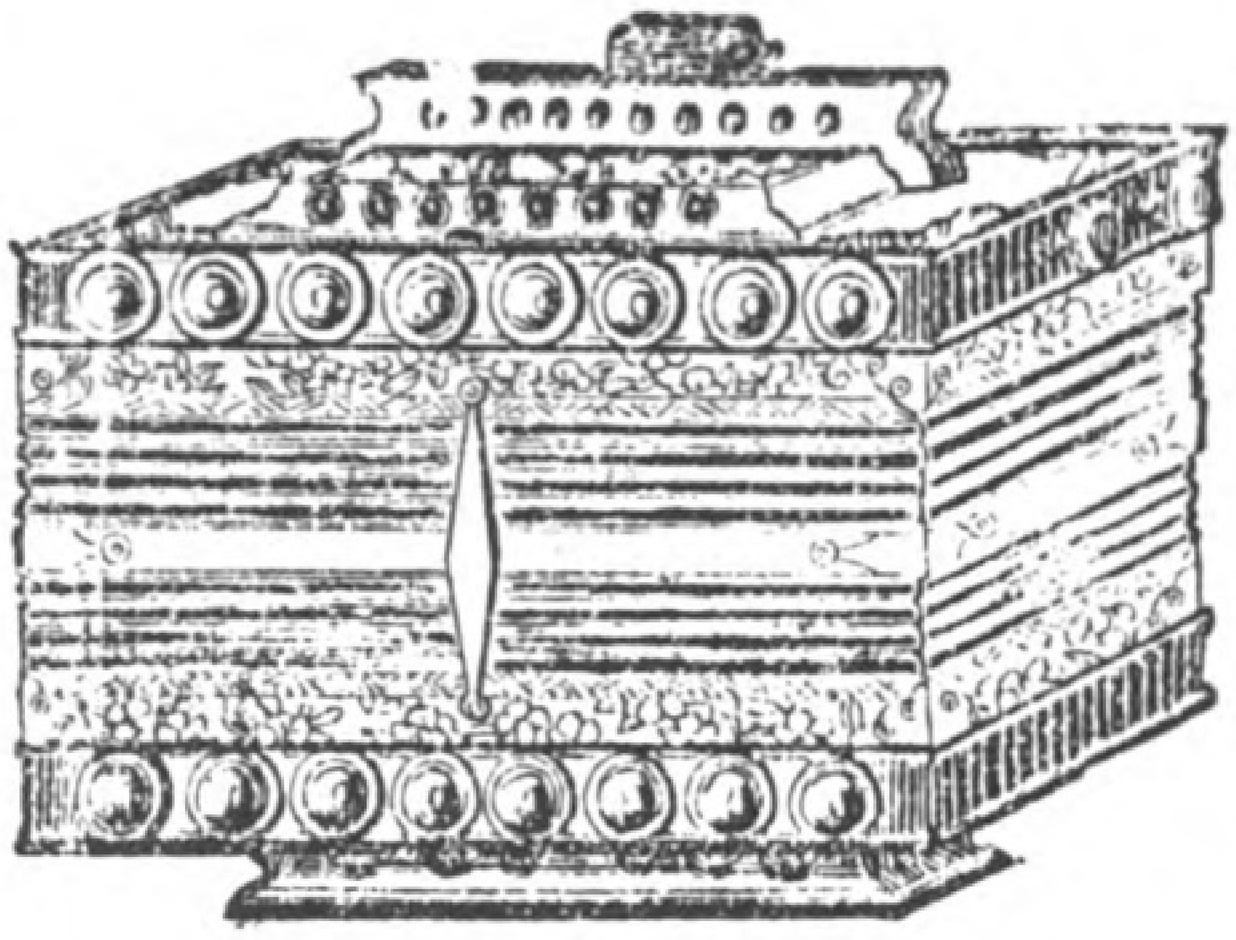
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

四竈訥治君著

手風琴獨習の友

第一集 定價金二十錢 郵税を要せす



花晨月夕手を携へて親む友は手風琴あり一家の團欒朋友の集會商慶の休日膝を交へて樂む友は手風琴あり手琴は簡便にして奏法も亦容易あり本書は最初に詳細なる奏法の説明を掲げ一瞥一讀未だ音樂の何物たるを知らざる兒童の諸君と雖ども容易に解し得て忽ちに彈奏する事を得べし曲の種類は唱歌明清樂曲軍歌端唄流行節等に至るまで網羅して何れの席何れの會に玩ぶも少しも賤しき事なく又恥る事なし四時の行樂場裏に携へて言ふ可らざる好趣味あり請ふ音樂を愛せらるゝ諸彦は速く來りて一本を味ひ此言の謳ならざるを知られんことを

奥　好義先生選

唱歌萃錦

第二集　定價金十錢

奥好義先生選

第一　定價　金十錢　郵税　金二錢

右は男爵高崎正風、物集高見、下田歌子、税所敦子、中村秋香、大和田建樹、平田盛胤、加部巖夫、鳥居忱、服部元彦、東宮鉄眞呂、石橋思案、岑久之助、鳥山啓作、黒川眞頼、鈴木重嶺、湯本武比古、本居豊穎等の有名家の作歌と「もざーとわぐなー」等の大音樂家及び本邦音樂家奥、上、芝、納所等諸先生の作曲とを以て組成されたる詞譜雙絶の好唱歌集なり

白井規矩郎著

●音樂教科書

全一册　實價四十五錢　郵便税四錢

上眞行校閲　東儀季治譯

●小學唱歌教授法

訂正再版　全一册

定價金二十五錢　郵税金四錢

東京日本橋區通塩町八番地

中央堂書店

同　京橋區竹川町十三番地

共益商社書店

定價		
一册。	六錢	郵税。五厘（但府内無郵税）
十册。	五拾八錢	郵税。五錢（同前）
半年分	壹圓四拾三錢	府外は 壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢

發行所

東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY